

世界おとぎ文庫（イギリス・フランス童話篇）

# 妖女のおくりもの

ペロー Perrault 他  
楠山正雄 訳

# 青ひげ

ペロー Perrault  
楠山正雄 訳

## 一

むかしむかし、町といなかに、大きなやしきをかまえて、金の盆ぼんと銀のお皿さらをもつて、きれいなお飾りかざりとぬい、、、はくのある、いす、つくえと、それに、総金ぬりの馬車までももっている男がありました。こんなしあわせな身分でしたけれど、ただひとつ、運のわるいことは、おそろしい青ひげをはやしていることで、それはどこのおくさんでも、むすめさんでも、この男の顔を見て、あつ、といつて、逃げ出さないものはありませんでした。

さて、この男のやしき近くに、身分のいい奥さんおくがあつて、ふたり、美しいむすめさんをもっていました。この男は、このむすめさんのうちどちらでもいいから、ひとり、およめさんにもraitたいといつて、たびたび、この奥さんをせめました。けれど、ふたりがふたりとも、むすめたちは、この男を、それはそれはきらつていて、逃げまわつてばかりいきました。なにしろ青ひげをはやした男なんか、考えただけでも、ぞつとするくらいです。それに、胸のわるいほどこい、やなことには、この男は、まえからも、いく人か奥さまをもつていて、しかもそれがひとりのこらず、どこへどう行つてしまったか、ゆくえが分からなくなっていることでした。

そこで、青ひげは、これは、このむすめさん親子のごきげんをとつて、じぶんがすきに

なるようにしむけることが、なによりちか道だと考えました。そこで、あるとき、親子とそのほか近所きんじよで知りあいの若い人たちをおおぜい、いなかのやしきにまねいて、一週しゅうかん間あまりもとめて、ありつたけのもてなしぶりをみせました。

それは、まい日、まい日、野あそびに出る、狩かりに行く、釣つりをする、ダンスの会だの、夜会やかいだの、お茶の会だのと、目のまわるようなせわしきでした。夜よるになっても、たれもねどこにはいろいろとするものもありません。宵よひがすぎても、夜中がすぎても、みんなそこでもここでも、おしゃべりをして、わらいさざめいて、ふざけっこしたり、歌をうたいあつたり、それはそれは、にぎやかなことでした。とうとうこんなことで、なにもかも、とんとんびようしにうまくはこんで、すえの妹のほうがまず、このやしきの主人のひげを、もうそんなに青くは思わないようになり、おまけに、りっぱな、礼儀れいぎただしい紳士しんしだとまでおもうようになりました。

さて、うちへかえるとまもなく、ご婚こん礼れいの式がすみました。

それから、ひと月ばかりたったのちのことでした。

青ひげは、ある日、奥おくがたにむかって、これから、あるたいせつな用むきで、どうしても六週しゅうかん間、いなかへ旅をしてこなければならぬ。そのかわり、るすのあいだの気ばらしに、お友だちや知りあいの人たちを、やしきに呼んで、里の家にいたじぶんとおなじように、おもしろおかしく遊んで、くらしでもかまわないから、といいました。

「さて、」と、そのあとで、青ひげは奥がたにいいました。「これはふたつとも、わたしのいちばん大事な道具どうぐのはいっている大戸棚おとだなのかぎだ。これはふだん使わない金銀の皿を入れた戸棚のかぎだ。これは金貨きんかと銀貨をいっぱい入れた金庫きんこのかぎだ。これは宝石ほうせき箱のかぎだ。これはへやのこらざるの合いかぎだ。さて、ここにもうひとつ、ちいさなかぎがあるが、これは地下室ちかしつの大ろうかの、いちばん奥おくにある、小べやをあけるかぎだ。戸棚という戸棚、へやというへやは、どれをあけてみることも、中にはいつてみることも、おまえの勝手かたてだが、ただひとつ、この小べやだけは、けつしてあけてみることも、まして、はいつてみることはならないぞ。これはかたく止めておく。万一にもそれにそむけば、おれはおこって、なにをするか分からないぞ。」

奥がたは、おしいつけのとおり、かならず守りますと、やくそくしました。やがて青ひげは、奥がたにやさしくせつぷんして、四輪馬車に乗って、旅だって行きました。

すると、おくがたの知りあいや、お友だちは、お使を待つまも、もどかしがって、われさきにあつまって来ました。およめ入りさきの、りっぱな住まいのようすが、どんなだかどのくらい、みんなは見たがっていたでしょう。ただ主人がうちにいるときは、れいの青ひげがこわくて、たれも寄りつけなかったのでございます。

みんなは、居間、客間、大広間から、小べや、衣裳べやと、片っぱしから見てあるきましたが、いよいよ奥ぶかく見て行くほど、だんだんりっぱにも、きれいにもなっていくようでした。

とうとうおしまいに、いっばい家具のつまった、大きなへやに来ました。そのなかの道具やおきものは、このやしきのうちでも、一等りっぱなものでした。かべかけでも、ねだいでも、長いすでも、たんすでも、つくえや、いすでも、頭のとっぺんから、足の爪さきまでうつるすがたみでも、それはむやみにたくさんあって、むやみにぴかぴか光って、きれいなので、たれもかれも、ただもう、かんしんして、ふうと、ため息をつくだけでした。すがたみのなかには、水晶のふちのついたものもありました。金銀めっきのふちのついたものもありました。なにもかも、この上もなくけっこうずくめなものばかりでした。

お客たちは、まさかこれほどまでもおもわなかった、お友だちの運のよさに、いまさら感心したり、うらやましがったり、いつまでもはてしがありませんでしたが、ご主人の奥がたは、いくらりっぱなおへやや、かざりつけを見てあるいても、じれつたいばかりで、いっこうにおもしろくも楽しくもありませんでした。それというのが、夫が出がけにきびしいつけておいていった、地下室のひみつの小べやというのが、しじゅう、どうも気になって気になって、ならないからでございます。

いけないというものは、とかく見たいのが、人間のくせですから、そのうちいよいよ、がまんがしきれなくなってくると、この奥がたは、もうお客にたいして、失礼のなんのということをおもってはいられなくなって、ひとりそつと裏ばしごとをおりて、二ども三ども、首の骨がおれたかとおもうほど、はげしく、柱や梁にぶつかりながら、むちゆうでかけ出して行きました。

でも、いよいよ小べやの戸の前に立ってみると、さすがに夫のきびしいつけを、

はっとおもい出しました。それにそむいたら、どんなふしあわせな目にあうかしれない、そうおもって、しばらくためらいました。でも、さそいの手が、ぐんぐんつよくひっぱるので、それをほらいきけることは、できませんでした。そこで、ちいさいかぎを手にとって、ぶるぶる、ふるえながら、小べやの戸をあけました。

窓がしまっているのです、はじめはなんにも見えませんでした。そのうち、だんだん、くらやみに目がなれてくると、どうでしょう、その床ゆかの上には、いっぱい血のかたまりがこびりついていて、五六人の女の死がい、を、ならべてかべに立てかけたのが、血の上うつって見えていました。これは、みんな青ひげが、ひとりひとり、結婚けっこんしたあとで殺してしまった女たちの死がいでした。これを見たたん、奥がたは、あつとといったなり、息がとまって、からだがすくんで動けなくなりました。そうして、戸のかぎ穴からぬいて、手にもっていたかぎが、いつか、すべり落ちたのも知らずにいたくらいです。

しばらくして、やっとわれにかえると、奥がたはあわてて、かぎを拾いあげて、戸をしめて、いそいで二階の居間にかけてかえると、ほつと息をつきました。でも、いつまでも胸がわくわくして、正気しょうきがつかないようでした。

見ると、かぎに血がついているので、二三ど、それをふいてとろうとしましたが、どうしても血がとれません。水につけて洗ってみても、せつけんのみがき砂をつけて、といしで、ごしごし、ごすってみても、いっこうにしろしがみえません。血のついたあとはいよいよ、こくなるばかりでした。それもそのはず、このかぎは魔法まほうのかぎだったのです。ですから、おもてがわのほうの血を落したかとおもうと、それはうらがわに、いつか、よけいこく、にじみ出していました。

### 三

すると、その日の夕方、青ひげが、ひよっこり、うちへかえって来ました。それは、まだむこうまで行かないうち、とちゆうで、用むきが、つごうよく片づいた、という知らせを聞いたからだど、青ひげは話しました。だしぬけにかえってこられたとき、奥がたは、ぎよつとしましたが、いっしょうけんめい、うれしそうな顔をして見せていました。

さて、そのあくる朝、青ひげは、さつそく、奥がたに、あずけたかぎをお出しといいま

した。そういわれて、奥がたがかぎを出したとき、その手のふるえようといったらありませんでしたから、青ひげは、すぐと坎づいてしまいました。

「おや。」と、青ひげはいいました。「小べやのかぎがひとつないぞ。」

「じゃあ、きつと、あちらのつくえの上におきわすれたのでしょうか。」と、奥がたはこたえしました。

「すぐ持ってこい。」と、青ひげは、おこった声を出しました。

五六ど、あちらへ行ったり、こちらへ行ったり、まごまごしたあとで、奥がたは、しぶかぎを出しました。青ひげは、かぎを受けとると、こわい目をして、じつとながめていましたが、

「このかぎの血はどうしたのだ。」といいました。

「知りません。」と、泣くような声でこたえた奥がたの顔は、死人よりも青ざめていました。

「なに、知りませんだと。」と、青ひげはいいました。「おれはよく知っているよ。おまえはよくもおもいきつて、小べやの中にはいったな。えらいどきようだ。よし、そんなにはいりたければ、あそこへはいれ、はいつて、そこにいる奥さんたちのなかまになれ。」

こういわれると、奥がたは、いきなり夫おつとの足もとにつつぷして、いかにもまごころから、くいあらためたようすで、もうけつして、おいいつけにはそむきませんから、といって、わびました。このうえもなく美しい人の、このうえもなく悲しいすがたを見ては、岩でもとろけ出したでしょう。けれど、この青ひげの心は、岩よりも、かねよりも、かたかったのでございます。

「奥さん、あなたは死ななければならぬ。今すぐに。」と、青ひげはいいました。

「わたくし、どうしても死ななければならぬのでしたら。」と、奥がたはこたえて、目いっぱい涙をうかべて、夫の顔を見ました。「せめてしばらく、おいのりをするあいだだけ、待っててくださいまし。」

「しかたがない、七分半だけ待ってやる。だがそれから、一秒びょうもおくれることはならないぞ。」と、青ひげはいいました。

ひとりになると、奥がたは、女のきょうだいの名を呼びました。

「アンヌねえさま（アンヌというのは、きょうだいのなまえでした。）アンヌねえさま、後生ごしょうです、塔とうのてっぺんまであがって、にいさまたちが、まだおいでにならないか見てく

ださい。にいさまたちは、きょう、たずねてくださるやくそくになっています。見えたら、大いそぎでくるように、合図あいずをしてください。」

アン又ねえさまは、すぐ塔のてっぺんまであがって行きました。半分きちがいのようなになった奥がたは、かわいそうに、しじゅう、さけびつづけていました。

「アン又ねえさま、アン又ねえさま、まだなにもこないの。」  
すると、アン又ねえさまはいいました。

「日が照てつて、ほこりが立っているだけです。草が青く光っているだけです。」  
そのうちに青ひげが、大きな剣けんをぬいて手にもって、ありったけのわれがねこえを出して、どなりたてました。

「すぐおりてこい。おりてこないと、おれのほうからあがって行くぞ。」

「もうちよつと待ってください、後生ごしょうですから。」と、奥がたはいいました。そうして、ごくひくい声で、

「アン又ねえさま、アン又ねえさま、まだなにも見えないの。」と、さけびました。  
アン又ねえさまはこたえました。

「日が照てつて、ほこりが立っているだけです。草が青く光っているだけです。」  
「早くおりてこい。」と、青ひげはさけびました。「おりてこないと、あがって行くぞ。」  
「今まいります。」と、奥がたはこたえました。

そうして、そのあとで、「アン又ねえさま、まだなにも見えないの。」と、さけびました。  
「ああ、でも、大きな砂けむりが、こちらのほうにむかって、立っていますよ。」と、アン又ねえさまはこたえました。

「それはきつと、にいさまたちでしょう。」  
「おやおや、そうではない。ひつじのむれですよ。」  
「こら、おりてこないか、きさま。」と、青ひげはさけびました。

「今すぐに。」と、奥がたはいいました。そうして、そのあとで、「アン又ねえさま、アン又ねえさま、まだ、だあれもこなくって。」

「ああ、ふたり馬に乗った人がやってくるわ。けれど、まだずいぶん遠いのよ。」  
「ああ、ありがたい。」と、奥がたは、うれしそうにいいました。「それこそ、にいさまたちですよ。わたし、にいさまたちに、いそいでくるように合図あいずしましょう。」

そのとき、青ひげは、家ごとふるえるほどの大ごえでなりました。奥がたは、しおし

お、下へおりて行きました。涙をいっぱい目にためて、かみの毛を肩にたらし、夫のおつと足もとにつつぷしました。

「今さらどうなるものか。」と、青ひげはあざわらいました。「はやく死ね。」  
こういって、片手に、奥がたのかみの毛をつかみながら、片手で、剣をふりあげて、首をはねようと思いました。おくがたは、夫のほうをふりむいて、今にもたえ入りそうな目つきで、ほんのしばらく、身づくろいするあいだ、待ってくださいと、たのみました。

青ひげはこういって、剣をふりあげました。

「ならん、ならん。神さまにまかせてしまえ。」

そのとたん、おもての戸に、ドンと、はげしくぶつかる音がしたので、青ひげはおもわず、ぎよつとして手をとめました。とたんに、戸があいたとおもうと、すぐ騎兵がふたりはいつて来て、いきなり、青ひげにむかって来ました。これは奥がたの兄弟で、ひとりりゆうきへいは竜騎兵、ひとりは近衛騎兵だということを、青ひげはすぐと知りました。そこで、あわてて逃げ出そうとしましたが、兄弟はもう、うしろから追いついて、青ひげが、くつぬぎの石に足をかけようとするところを、胴中をひとつきつきさして、ころしてしまいました。

でもそのときには、もう奥がたも気が遠くなつて、死んだようになっていましたから、とても立ちあがって、兄弟たちを迎える気力はありませんでした。

さて、青ひげには、あとつぎの子がありませんでしたから、その財産はのこらず、奥がたのものになりました。奥がたはそれを、ねえさまやにいさまたちに分けてあげました。

ものめずらしがり、それはいつでも心をひく、かるいたのしみですが、いちど、それがみたされると、もうすぐ後悔が、代ってやってきて、そのため高い代価を払わなくてはなりません。



# 猫吉親方

またの名 長ぐつをはいた猫

ペロー Perrault  
楠山正雄 訳

一

むかし、あるところに、三人むすこをもった、粉<sup>こな</sup>ひき男がありました。もともと、びんぼうでしたから、死んだあとで、こどもたちに分けてやる財産<sup>ざいせん</sup>といつては、粉ひき白をまわす風車<sup>ふうしゃ</sup>と、ろぼと、それから、猫<sup>ねこ</sup>一匹<sup>ひとひき</sup>だけしかありませんでした。さていよいよ財産を分けることになりましたが、公証人<sup>こうしようにん</sup>や役場の書記<sup>しよき</sup>を呼ぶではなし、しごくむぞうさに、一ばん上のむすこが、風車<sup>ふうしゃ</sup>をもらい、二ばんめのむすこが、ろぼをもらい、すえのむすこが、猫<sup>ねこ</sup>をもらうことになりました。すえのむすこは、こんなつまらない財産<sup>ざいせん</sup>を分けてもらったので、すっかりしよげかえってしまいました。

「にいさんたちは、めいめいにもらった財産をいっしょにして働けば、りっぱにくらしていけるのに、ぼくだけはまあ、この猫をたべてしまつて、それからその毛皮で手袋をこしらえると、あとにはもうなんにも、のこりやしない。おなががへつて、死んでしまうだけだ。」

すえの子は、ふふくそうにこういいました。すると、そばでこれを聞いていた猫は、なにを考えたのか、ひどくもつたいぶつた、しかつめらしいようすをつくりながら、こんなことをいいました。

「だんな、そんなごしんぱいはなさらなくてもようございますよ。そのかわり、わたしにひとつ袋をこしらえてください。それから、ぬかるみの中でも、ばらやぶの中でも、かけぬけられるように、長ぐつを一そくこしらえてください。そうすれば、わたしが、きつとだんなを、しあわせにしてあげますよ。ねえ、そうなれば、だんなはきつと、わたしを遺産いせんに分けてもらったのを、お喜びなさるにちがいありません。」

主人は猫のいうことを、そう、たいしてあてにもしませんでした。けれども、この猫がいつもねずみをとるときに、あと足で梁はりにぶらさがって、小麦粉をかぶって、死んだふりをしてみせたりして、なかなかずるい、はなれわざをするのを知っていましたから、なにかつごうして、さしあたりのなんぎを、すくってくれるくふうがあるのかもしれない、とおもって、とにかく、猫のいうままに、袋と長ぐつをこしらえてやりました。

二

猫吉親方おやかたは、さつそく、その長ぐつをはいて、袋を首にかけました。そして、ふたつの前足で、袋のひもをおさえて、なかなか気取ったかつごうで、兎うさぎをたくさん、はなし飼がいにしてあるところへ行きました。そこで、猫は、袋の中にふすまふすまとちしちしやを入れて、遠くのほうへほうりだしておきました。そこから、袋のひもを長くのばして、そのはしをつかんだままじぶんはこちらに長ながとねころんで、死んだふりをしていました。こうして、まだ世の中のうちそを知らない若い兎たちが、なんの気なしに、袋の中のものをたべに、もぐりこんでくるのを待っていました。あんのじよう、もうさつそく、むこう見ずの若い、ばか兎が一ぴき、その袋の中へとびこみました。猫吉親方おやかたは、ここぞと、すかさずひもをしめて、その兎を、なさけようしやもなくころしてしまいました。そうして、それを、えいやつとかついで、鼻たかだかと、王様の御殿へ出かけて、お目どおりをねがいました。

猫吉は、王様のご前ぜんへ出ると、うやうやしくおじぎをして、

「王様、わたくしは、主人カラバ侯爵こうしやくからのいいつけで、きよう狩場かりばで取りましたえもの兎を一ぴき、王様へけん上にあがりました。」

カラバ侯爵こうしやくというのは、猫吉がいいかげんに、じぶんの主人につけたなまえですが、

王様はそんなことはご存ぞんじないものですから、

「それは、それは、ありがとうございます。ご主人に、どうぞよろしく御礼をいっておくれ。」と、おっしゃいました。

猫吉は、ばんじうまくいったわいと、心の中ではおもいながら、

「はいはい、かしこまりました。」と、申しあげて、びよこ、びよこ、おじぎをして、かえつて来ました。

そののちまた、猫吉は、こんどは、麦畠の中にかくれていて、れいの袋をあけて待っていますと、やまどりが二羽かかりました。それを二羽ともそっくりつかまえて、兎とおなじように、王様の所へもって行きました。

それからふた月三月のあいだというものの、しじゅうカラバ侯爵こうしやくのお使だと名のつては、いろいろと狩場かりばのえものを、王様へけん上じょうしました。そしてそのたんびに、猫吉はお金をいただいたり、お酒を飲まされたり、たつぷりおもてなしをうけるうちに、だんだん王様の御殿のようすが分かってきました。

### 三

ある日のこと、猫吉は、いつものように狩場のえものをけん上しに行きました。すると話のついでに、きょう、王様が美しいお姫さまをつれて、川へ遊びにお出かけになるということを知りました。そこで、猫吉は、さっそくかえつて来て、主人に話しました。

「もしもし、だんなが、わたしのいうとおり、なんでもなされれば、あなたは、じきしあわせになりますよ。それもたいしてむづかしいことじゃないんですよ。だんなはただ、きょう、川まで出かけて、わたしのおしえるとおりの所へ行つて、水をあびていればいいんです。そうすれば、あとはばんじ、わたしがいいようにしますからね。」

カラバ侯爵こうしやくは、そう聞いても、なにがなんだか、ちつともわけが分かりませんでした。が、なんでもかでも、猫吉のいうとおりになりました。さて、ちようど猫吉の主人、すなわちカラバ侯爵こうしやくが、水につかってからだを洗っているとき、そこへ王様の馬車が通りかかりました。すると、猫吉はきゆうに、火のつくように、かなきり声をあげてさけびたて

ました。

「助けてください。助けてください。カラバ侯爵がおぼれそうです。」

王様は、このさけび声を聞くと、なにごとかとおもって、馬車の窓から首をお出しになりました、見ると、しきりにどなっているのは、これまでに、たびたび狩場から、いろいろと、けつこうなえものを持ってきてくれた猫なので、王様はおそばの家来に、はやく行って、カラバ侯爵をお助け申せ、といいつけました。

家来が、いそいで川へおりて行って、カラバ侯爵を引きあげているあいだに、猫吉は王様のところへ出かけて行きました。

「わたくしどもの主人が、川につかって、からだを洗っておりますと、わるものがやって来たのでございます。主人はずいぶん大声で、なんども、どろぼう、どろぼうと申しましたのですが、とうとう、わるものは、着物をぬすんで、もって行ってしまいました。ですから、すぐに着る着物がございませぬ。」

猫吉は、こう王様にうったえました。じつは、その着物は、大きな石の下にかくしておいたのです。けれど、猫のいうことが、さもほんとうらしくきこえるので、王様は、御殿の衣裳べやのかかりにいつけて、いちばん上等な着物を、いそいで持って来て、カラバ侯爵にお着せ申せ、とおっしゃいました。

王様は、侯爵をたいへんていねいにもてなして、ごじぶんの、りっぱな着物を着せました。ところで、猫吉の主人は、生まれつきりっぱなようすの男でしたから、その着物を着ると、いかにも侯爵らしい上品なひとがらになりました。それを見た王様のお姫さまは、すっかり侯爵がすきになりました。そこで、王様は侯爵にすすめて、馬車に乗せて、いっしょに旅をすることにしました。

猫吉は、じぶんのけいりやくが、うまくあたったので、だいとくいで、馬車よりも先へあるいて行きました。すこし行くと、まきばの草を刈っているお百姓たちに出あいました。すると猫吉は、

「もうじき王様が馬車に乗ってお通りになるが、そのとき、このまきばはだれのものだ、といっておたずねになったら、これはカラバ侯爵のものだと、おこたえしなければいけないぞ。もしそうしなかつたら、それこそ植木鉢にはえたちいさな草を引っこ抜くように、おまえたちの首を、引っこ抜いてしまうぞ。」といって、すっかりお百姓たちを、おどしつけました。

王様が、やがてそこを、お通りかかりになりますと、なるほど猫吉のおもったとおり、このまきばは、だれのものだ、とおたずねになりました。けれどお百姓たちは、すっかり猫吉におどかされていましたから、

「わたしどものご主人、カラバ侯爵さまのものでございます。」と、みんな声をそろえてこたえました。

王様は、うまうまと、だまされておしまいになりました。そして、侯爵にむかつて、まじめにおよろこびをおっしゃいました。

「どうもたいした土地もちでおいでだな。」

そこで侯爵は、すかさず、そのあとについて、

「ごらんとおり、このまきばからは、まい年、なかなかたくさん取りいれがございませので。」と申しました。

#### 四

まずこういうやり方で、猫吉親方は、いつも馬車の先に立つてあるいて行つては、麦刈り、草刈りをしている男とみると、おなじようなことをいって、おどしました。

「王様がお通りになつたら、これはみんなカラバ侯爵の畠でございませというのだ。そういういわないと、おまえたちみんな、挽き肉にしてしまふぞ。」

そういつてあるいたあとに、すぐ王様は通りかかつて、麦畠も、牧場もみんなカラバ侯爵のものだときかされました。そのたんびに、王様は、カラバ侯爵が、たいへんな広い領地をもっているのに、すっかりびっくりしておしまいになりました、そうしてそのたんびに侯爵にむかつて、

「どうもたいしたご財産で。」といいました。

このあいだに、猫吉親方は、ひとりさききに、どんどんあるいて行つて、とうとう人くい鬼が住んでいる、りっぱなお城へ来ました。この人くい鬼は、世にもすばらしい大金持で、王様が、みちみち通つておいでになった、カラバ侯爵のものだという広大な領地も、じつはみんな人くい鬼のものでした。猫吉は、この人くい鬼のことをよく聞いて知っていましたから、そのとき、ずんずんお城の中へはいつて行つて、

「ご近所を通りかかりましたのに、あなた様のごきげんもうかがわずに、だまつて通る法はございませんので、おじやまにあがりました。」と、さも心から、うやまつているように申しました。

それを聞いた人くい鬼は、すっかり喜んで、人くい鬼そうおうなれいぎで、猫吉をもてなしました。

さて、ゆつくり休ませてもらったところで、猫吉は、おそるおそる、

「あなた様は、ごじぶんでなろうとおもえば、どんなけもののがたにもおなりになれるのだそうでございますが、それでは、ししとかぞうとかいったような、あんな大きなけものにもおなりになれるのでございますか。」と、たずねました。

すると、人くい鬼は、早口に、

「なれなくつてき。なれなくつてき。よしよし、うそでないしようこに、ひとつ、ししになつて見せてやろう。」

こういって、いきなりししになつてしまいました。猫はすぐ鼻のさきに、大きなししがふいにあらわれたので、あわてて、長ぐつのまま、あぶないもこわいもなく、軒のかけひの上にかけてあがりました。しばらくたつて人くい鬼が、やっと、もどおりのすがたになつたのを見すまして、猫吉はそろそろ、かけひからおりて来ました。

「どうも、じつに、おどろきました。わたくしは、今にもひとつかみになさるかと思つて、ぶるぶるふるえていたのでございますよ。ところで、これも人から聞きました話で、あてにはなりません、あなたはまた、ずっと小さなけもの、たとえばねずみなら、はつかねずみのような小ねずみなんかにも、なろうとおもえばおなりになれるということですが、まさかねえ、こればかりは、とても信じられません。」

こういって、猫は、うたがいぶかいような目をしました。

「なに、信じられん。」と、人くい鬼はおこつてさげびました。「よしよし、すぐ小ねずみになつて見せよう。」

人くい鬼は、いうまに、一ぴきのはつかねずみにかわつてしまいました。そして、ちよろ、ちよろ、床の上を駆けまわりました。猫吉はしめたというなり、すばやく、小ねずみにとびかかるが早い、あたまから、むしやむしやと、たべてしまいました。

そのとき、お城のそとのつり橋を、王様の馬車のわたつてくる音がきこえました。猫吉は、その音を聞きつけると、さつそく、お城の門のところへ出て行って、王様にこう申しました。

「さあ、どうぞ、王様には、カラバ侯爵のお城におはいりくださいませよう。」  
王様は、さつきからこのお城に気がついていました。そして、だれのお城だか知らないが、中はさぞかしりっぱだろうから、はいつてみたいものだど、おおもいになつていたところでした。ですから、猫吉がそういうのを聞くと、ますますおどろいておしまいになりました。

「なに、これも侯爵のお城。いやどうも、お庭といい、建物といい、こんなにりっぱなお城は見たことがないわい。では、拝見しよう。どうぞ案内をたのみますぞ。」

王様が馬車からおりると、猫吉は、そのあとからついて行きました。カラバ侯爵はお姫さまに手をかして、そのあとにつづきました。やがて大広間にはいると、おかざりしたテーブルの上に、りっぱなごちそうがならんでいました。じつは、このごちそうは、きよう、たずねて来るはずの友だちのために、人くい鬼がたくしておいたものでした。けれども猫吉は、それがわざわざ、王様やお姫さまのために用意させてあったもののように見せかけました。人くい鬼の友だちも、王様がおいでときいて、えんりよして、かえって行きました。

やがて、みんなはテーブルについて、ごちそうをたべました。王様は、お姫さまとどうよう、侯爵のりっぱなひとがらに、すっかりほれこんでおしまいになりました。そのうえ、侯爵が、たいへんお金持なのを知って、なおなお、このもしくおもいました。そこで五六ぱい、さかずきをあげてから、王様は、  
「どうぞでしょう、侯爵、おいやでなかったら、姫と結婚してくださいませんか。あなたはわたしどもにとって、申しぶんのない方です。」と、いいました。

侯爵はそのとき、うやうやしく敬礼したのち、王様の申し出された名誉を、よろこんで、お受けすることにしました。そうしてその日、さつそくお姫さまと結婚しました。さて、猫吉は、大貴族にとり立てられました。それからもう、やたらにねずみを取っ

たりしないで、気らくに、その日その日をおくりました、と、さ。

親ゆずりの財産けいよずりのざいさんに、ぬくぬくあたたまっているよりも、若いものは、自分の智恵ちえと、う  
でを、もとでにするにかぎります。



# 眠る森のお姫さま

ペロー Perrault  
楠山正雄 訳

## 一

むかしむかし、王様とお妃がありました。おふたりは、こどももないことを、なにより悲しがつておいでになりました。それは、どんなに悲しがつていたでしょうか、とても口ではいいつくせないほどでした。そのために、世界じゅうの海という海を渡って、神様を願がをかけるやら、お寺に巡じゅん礼れいをするやらで、いろいろに信心しんじんをささげてみましたが、みんな、それはむだでした。

でもそのうち、とうとう信心のまことがとどいて、お妃に、ひいさまの赤ちゃんが生まれました。それでさつそく、さかんな洗せん礼れいの式しきをあげることになって、お姫ひめさまの名づけ親おやになる教母きょうぼには、国じゅうの妖女ようじよが、のこらず呼び出されました。その数は、みんな七人でした。そのじぶんの妖女なかまのならわしにしたがい、七人の妖女は、めいめい、ひとつずつ、りっぱなおくりものを持って来るはずでした。ですから、生まれたときから、お姫さまには、もうこの世でのぞめるかぎりのことで、なにひとつ身にそわないものはなかったのです。

さて洗礼式がすんだあと、呼ばれた七人のなかま一同が、王様のお城にかえりますと、そこには、妖女たちのために、りっぱなごちそうのしたくが、できていました。ひとりひとりの食卓しょくたくの上には、お皿さらや杯さかずきの食器しょくきがひとそろいならべてあって、それは、

大きな金の箱にはいつている、さじだの、ナイフだの、フォークだの、こののこらずが、ダイヤモンドとルビーをちりばめた、純金製のものでした。

ところで、みんなならんで食卓についたとき、ふと見ると、いつどこからやって来たか、たいへん年をとった妖女がひとり、のそのそと広間にはいつて来ました。けれどこの妖女は、この席に呼ばれてはいなかったのです。

というわけは、このおばあさんの妖女は、今から五十年もまえ、ある塔の中にこもつたなり、すがたをかくしてしまつて、もういまでは、死んでしまつているか、魔法にでもかけられて、なにかかわつたものにされてしまつた、とおもわれていたからです。

王様はあわてて、この妖女の前にも、ひとそろい食器を並べさせました。でも、それはもう、大きな金の箱に入れた純金製のものではありませんでした。なにしろお客は七人のはずでしたから、七人まえのしたくしか、できてはいなかったのです。するとおばあさんの妖女は、じぶんだけが、けいべつされたようにおもつて、口の中で、なにかぶつぶつ、口ごごとをいつていました。

そのとき、ほかの若い妖女のひとりが、そばにとなりあわせていて、おばあさんのくどくどいうことばを、そつと聞いていました。それで、このおばあさんが、王女になにかよくないおくりものをしようと、たくらんでいることがわかりましたから、食事がすんで、みんなが食卓から立ちあがると、そのまま、その妖女は、とぼりのかげにかくれていました。それは、こうしてかくれていて、そのおばあさんが、なにをたくらもうとも、じぶんがそのあとに出て、すぐ、そののろいのことばを、うち消すようなことをいつて、それをお姫さまへのおくりものにしよう、とおもつたからです。

そうこうするうちに、いよいよ、妖女たちは、それぞれ、お姫さまにおくりものことばをのべることになりました。なかで、いちばん若い妖女は、お姫さまが世界一美しい人になられますように、といいました。つぎの妖女は、天使のようなおこころがさずかれますように、といいました。三ばんめの妖女は、王女のたちいふるまいの、やさしく、しとやかにありますように、といいました。四ばんめの妖女は、たれおよぶもののないダンスの上手になられますように、といいました。五ばんめの妖女は、小夜啼鳥のような、やさしい声でおうたいになりますように、といいました。六ばんめの妖女は、どんな楽器にも、名人の名をおとりになりますように、といいました。いよいよおしまいに、おばあさんの妖女の番になりました。この妖女は、さもいまいましそうに首をふりながら、

王女は、その手を糸車のつむにさされて、けがをして死ぬだろうよといいました。このおそろしいおくりものは、身ぶるいの出るほど、みんなをびっくりさせて、たれもお姫さまのために泣かないものはありませんでした。そのときです、若い妖女が、とばりのかげから出て来て、とても大きな声で、つぎのようなことばをいいました。「いいえ、王様、お妃様、だいじようぶ、あなたがたのだいじなおひいさまは、いのちをおなくしになるようなことはありません。もつとも、わたくしには、この年よりのいったんかけたのろいを、のこらずときほごすまでの力はございません。おひいさまは、なるほど手のひらに、つむをおつきたてになるでしょう。けれどそのために、おかくれになるということはありません。ただ、ぐつすりと、ねこんでおしまいになって、それは百年のあいだ、目をおさましになることがないでしょう。そして、ちようど百年めに、ある国の王子さまが来て、おひいさまの目をおさまし申すことになるでしょう。」

二

王様は、妖女のおばあさんのよげんしたさいなんを、どうかしてよけたいとおもいました。そこで、その日さつそく、国じゆうにおふれをまわして、たれでも、糸車につむをつかうことはならぬ。家のうちに、一本のつむをしまっておくことすら、してはならぬ。それにそむいたものは死刑にすると、きびしくおいわたしになりました。

さてそれから、十五六年は、ぶじにすぎました。あるとき、王様とお妃様が、おそろいで、離宮へ遊びにお出かけになりました。そのおるすに、ある日、若い王女は、お城の中をあちこちとかけあるいておいでになりました。するうち、下のへやから上のへやへと、かけあがって行って、とうとう塔のてっぺんの、ちいさなへやにはいりました。見ると、そこには、人のよさそうなおばあさんが、ひとりぼっちですわっていて、つむで糸をつむいでいました。このおばあさんは、つむを使ってはならないという、きびしい王様のおふれを、つい聞かなかったものとみえます。

「おばあさん、そこでなにをしているの。」と、お姫さまはたずねました。

「ああ、かわいいじよツちゃん、わたしや、糸をつむいでいるのだよ。」と、おばあさんはいいました。

このお婆あさんは、王女がたれだか、すこしも知らないようでした。

「まあ。」と、王女はいいました。「なんてきれいなんでしょう。それはどういうふうにやるものなの。あたしにかしてごらんさいな。あたしにもできるかどうか、やってみたいから。」

お姫さまは、こういって、そのつむを、手にとりましたが、それは持ち方がいけなかったのか、たいへんあわてて、ぶきような持ち方をしたのか、それとも、あのわるい妖女のろいのことばが、いよいよしるしをあらわすときになったのか、とたん、つむは、いきなり王女の手にささって、王女はぼったり、そこに倒れてしまいました。

人のいいお婆あさんは、あわてて人を呼びました。みんな、お城のそこからもここからも、かけ出してきました。お姫さまの顔に水をそそぎかけたり、ひもをといて着物をゆるめたり、手のひらをたたいてみたり、ハンガリア女王の水という薬で、こめかみをもんだり、いろいろにしてみても、王女は息をふきかえしませんでした。

さて、王様はこのさわぎを聞いて、さつそくかけつけておいでになりました。そうして十五年むかしの妖女のよげんを思い出しながら、やはりこうなるうんめいだったことをさとって、お姫さまを、そのまま、お城のなかでも、いちばん上等のへやにつれて行かせ、金と銀のぬいとりをした、きれいなねだいの上にねかしました。

ねだいの上に、すやすや眠っておいでになるお姫さまの、美しさといってはありませぬ。それはちいさな天使だといってもいいくらいでした。人ごちがなくなっても、生きているとおりの顔いろをしていて、ほおは、せきちく色をしていましたし、くちびるは、さんごをならべたようでした。目こそつぶってはいますものの、かすかに息をする音は聞こえます。それで、王女が死んでいないということがわかったので、まわりについている人たちは、よろこんでいました。

王様はそこで、やがて人が来て、目をさまさせるまで、しずかにねかしておくようにと、きびしくおいいつけになりました。

さて、王女を百年のあいだ眠らせることにして、やっと、あやういいのちをとりとめた、あの心のいい妖女は、ちょうどこのさわぎの起こったとき、一万二千里はなれた、マタカン国に行っていました。その使っているこびとから、この知らせをすぐうけとりました。そのこびとは、『七里とびの長ぐつ』といって、ひとまたぎに七里ずつあるく長ぐつをはいて、かけて行ったのです。それで、妖女はさつそくそこを出て、竜にひかせ

た火の車に乗ると、ちょうど一時間で、王様のお城につきましました。

王様は、お手ずから、妖女を馬車から助けおろしました。妖女は、王様のなさったことを、すべてけっこうですといたしました。でも、たいへん先のことのよく見える妖女でしたから、百年ののちに、お姫さまがせつかく目をさましても、この古いお城の中に、たったひとり、ぼつねんとしているのでは、どうしていいか、わからなくて、さぞお困りになるだろうと思いました。

そこで、なにをしたでしょうか。妖女は、魔法の杖をふるって、王様とお妃をのぞいては、お城のなかの物のこらさず、それはおつきの女教師から、女官から、おそばづきの女中から、宮内官、表役人、コック長、料理番から、炊事係、台所ボーイ、番兵、おやといスイス兵、走り使いの小者までのこらさず、杖でさわりました。それから、おなじようにして、べつとうといっしよに、うまやでねている馬も、裏庭に遊んでいるむく犬も、お姫さまのねだいの上で眠っているお手飼の狎までも、みんな魔法の杖でさわりました。魔法の杖でさわると、すぐ、たれもかれも、なにもかも、たわいもなく眠りこけてしまつて、お姫さまが目がさますまでは、けっして目をさましませんし、お姫さまに用事ができれば、いつでも目をさまして、御用をつとめるはずでした。なにもかも眠つてしまつたといつて、それはかまどの前の焼きぐしまでが、きじや、やまどりの肉をくしにきしたまま、やはり眠つてしまいました。これだけのことが、みんな、ほんの目ばたきひとつするまに、できあがつてしまいました。妖女というものは、まったくしごとの早いものですね。

さてそこで、王様とお妃とは、お姫さまのひたいに、そつと、やさしくほおずりして、お城から出て行きました。そうしておいて、たれもお城に近づくことはならないといふきびしいおふれを、また国じゆうにまわしました。

でも、そのおふれは、わざわざ出すまでもありませんでした。なぜというに、十五分とたたないうち、お城をとりまわしている園の中に、たくさん高い木やひくい木が、もつさりと茂りだして、そのあいだには、いばらや草やぶが、びっしり鉄条網のようにからみついてしまいましたから、人間もけだものも、それをくぐつてはいることはできなかつたからです。

そういうわけで、しばらくすると、そこから見えるものは、お城の塔のてっぺんだけになりました。それも、よほど遠くにはなれてでなければ、見えないのです。これも、妖女

のみごとな、はなれわざだったことがわかりました。こうして、王女は眠っているあいだたれひとりおもしろ半分、のぞきにくることもできないようになったのでございます。

三

さて、百年は夢のようすぎました。そのじぶん、その国をおさめていた新しい王様の王子が、ある日、眠る森の近くを通りかかりました。

この王子は、眠っている王女の一族が、とうに死にたえて、そのあとに代って来たべつこの王家の王子で、その日はちょうど、そのへんに狩に出かけて来たかえり道なのです。それで、遠くからお城の塔をみつけると、あの森の中にある塔はなんだといって、おそばの者にききました。

みんなは、てんでん、じぶんの聞いているとおりをこたえました。

なかのひとりは、あれは、ゆうれいが出るといひようばんの、古い荒城だいいました。

すると、またひとりが、あれはこの国の魔法使や、わるいみこたちが、夜会をする場所だといいました。

そのなかで、わりあい、おおぜいのものいうところでは、あれは昔から人くい鬼の住んでいるお城で、ちいさなこどもをつかまえては、みんなあそこへさらって行って、それで、たれもあとからついてこれないように、あのとおり、じぶんだけ通って行ける森をこしらえて、その中でゆっくりたべるのだということでした。

王子は、このうちのどれを信じていいか、わからないので、まよっていますと、そのとき、ひとり、この土地に古くからいる年よりのお百姓が、こういいました。

「王子さま、失礼ではございますが、わたくしが五十年も前、父から聞きました話では、——その父はまた、もとは、じじいから聞いたのだと申しますが、——このお城の中には、それはそれは美しい王女のお姫さまが住んでおりまして、もう百年のあいだ、ずっと眠りつづけたあと、ちょうど百年めに、ある王様の王子が来て、目をさましてくださるのを、待っているのだということでございます。」

若い王子は、この話を聞くと、からだじゆうに、かっとなついで血がもえあがるように

おもいました。ぜひとも、このめずらしいできごとのおさまりを、自分でつけてしまわなければとおもいました。美しいお姫さまをさずかるうえに、たれもはいれない魔法のお城をきりひらく名誉が、自分のものになるとおもうと、もううしろからからだを押しされるような気がして、さっそく、そのしごとにかかろうと決心しました。

そこで、王子は、森にむかつてずんずん進んでいきますと、大きな木も低い木も、草やぶもいばらも、みんな道をよけて通しました。その広い道をどこまでも行きますと、やがてその奥にあるお城に着きました。

ところで、すこしばびくりしたことには、ふとふりかえってみると、家来に、ひとりもついてくるものがないのです。なぜというに、王子がはいるといっしよに、すぐ森の口がしまってしまったからです。けれども、王子はかまわずに、ずんずん進んでいきました。若いやさしい、そして火のようにあつい心をもった王子は、いつも勇気のあるものです。

王子はやがて大きな広い庭に出ました。そこでまず見たものは、どんなこわいもの知らずでも、ぞつとして、骨までこおるようなものでした。なにもかも、気味のわるいほど、しいんとしずまりかえっていました。そこにも、ここにも、目に見えるものは、人間や動物が、みんな死んだもののように、ぐんにやり手足をなげ出しているすがたでした。けれども、そこに立っている、おやといスイス兵の鼻いきは、ぷんとお酒くさいし、ぽおつと赤いほほをしているのを見ても、この連中は、みんな眠っているのだということが、すぐ分かりました。しかも、その手にもった茶わんには、まだぶどう酒のしずくがのこっているのです。なかまとお酒もりのさいちゆう、眠ってしまったのだということまで知れました。

王子はそれから、大理石をしきつめた大ろうかを通して、かいだんの上まで行って、番兵のつめているへやにはいりますと、番兵らは鉄砲を肩にのせてならんだまま、ありったけの高いびきをかいてねていました。それからまた進んで、いくつかのへやを通って行きますと、どのへやにも、紳士たちや貴婦人たちが、立っているものも、腰をかけているものも、みんな、たわいなく眠りこけていました。とうとう、おしまいにはいつたのは、のこらずが金づくめのきらきらしいへやでした。そこに、りっぱなねだいがすえてあって、四方のとばりのこらず、あげた中に、それこそこの世にふたつとない美しいものがあらわれました。たぶん十五六くらいのお姫さまが、こうごうしく光りかがやくすがたで、眠っていたのです。あつと、おどろきながら、王子はふるえる足をふ

みしめふみしめ、その前にひざまづきました。

さあ、これで魔法の力もいよいよつきたのでしよう、王女は、ふと目をさしました。そして、なんともいえないやさしい目で、じいっと王子のほうをながめました。

「王子さま、あなたでございましたの。」と、お姫さまはそういって、にっこりしました。「ずいぶん待っていたいただきましたのね。」

王子は、このことばを聞くと、なんといって、心のよろこびをいいあらわしていいか、分かりませんでした。王子は、じぶんのことよりも、どんなにかよけいに、お姫さまのことを、おもっているか知れないといいました。ふたりの話は、話すというよりも、泣いているといったほうがいいほど、ただもう、しどろもどろなものでした。ことばは、よどみがちでしたが、やさしい心のいずみは、かえって、いきおいよく流れ出しました。

それに、王子のほうは、きまりはわるいし、ただおどろいているばかりなのに、王女のほうは、なにしろ百年のあいだ、妖女がおもしろい夢を、それからそれと見どおしに見せてくれたのですから、いくら話しても話しても、話のたねがつきるということがないので。ですからふたりは、かれこれ四時間もぶっとおしに話しつつづけていて、そのくせ話したいことの半分も話しきらずにいました。

そうこうするうち、お姫さまといっしょに、お城のそこでもここでも、みんなが目をさしました。たれもかれも、じぶんじぶんのしごとを思い出しました。ところで、みんなは、さしあたり、ほかに、くろうもくつたくもありませんでしたから、まつさきにおなかですいて、倒れそうにおもいました。女官頭は、ほかの人たちとおんなじに、ひどくおなかかへって、がまんできないほどでしたから、だしぬけに大きな声で、お姫さま、お夕飯のおしたくができましたと、申しあげました。王子は、王女のお姫さまを助けて立ちあがらせました。お姫さまは、ずいぶんりっぱなふうをしていましたが、なにしろそれは百年まえにはやった、王子のひいおばあさんの着物とおなじようなこと、さすがにお姫さまにむかっていうことは、えんりよしていました。いくら流行おくれなふうはしていますが、それがために、王女の美しさにも、かわいらしさにも、いっこう、かわりはなかったのですからね。

さて、ふたりは、鏡の間に出て行きました。そこで夕飯の食卓について、王女づきの女官たちがお給仕に立ちました。そのあいだ、バイオリンだの、木笛だのが、百年まえの古い曲をかなでました。それは、百年まえの古い曲にちがいありませんでしたが、



りつぱな音楽であることにかわりはありませんでした。

食事がすむと、時をうつさず、大僧正は、ふたりをお城の礼拝堂へ案内して、ご婚礼をすませました。女官頭は、ふたりのためにとばりをひきました。

#### 四

ふたりはその晩、ほんのわずかしか眠りませんでした。王子は、あくる朝、王女にわかれて町へかえりました。おとうさまの王様が、待ちこがれておいでになるところへ、かえって行ったのでございます。

王子は、狩をしていられるうち、森の中で道にまよって、一軒の炭焼小屋にとまって、チーズや黒パンをたべさせてもらったことなどを話しました。おとうさまの王様は、人のいい人でしたから、王子のいうことをほんとうになさいました。けれど、おかあさまのお妃は、もうさつそく、王子には、およめさんができていることを、おさとりになりました。

それから二年たちました。王女には、ふたりも子どもが生まれました。上の子は女の子で、これは「朝」という名でした。下の子は男の子でこれは「昼」という名でした。そのわけは、弟のほうが、ねえさんよりも、ずっとりつぱで、美しかったからでございます。それからまた二年たつて、王様がおかくれになって、王子が、新しい王様の位につくことになりました。そこではじめて、天下はれて、王女と結婚のしだいを、国じゅうに知らせました。そうして、りつぱな儀式をととのえて、あらためて、眠る森から、お姫さまをお迎えになりました。王女はふたりの子どもを両わきにのせ、美しい行列の馬車をそろえて、王様のお城に乗りこみました。

美しいりつぱな、いい心をもったあいてを、待っているということは、むずかしいことです。でも、待つことによって、幸福はましこそすれ、へるということはありません。

# 灰だらけ姫

またの名「ガラスの上ぐつ」

ペロー Perrault  
楠山正雄 訳

## 一

むかしむかし、あるところに、なに不自由なく、くらしている紳士しんしがありました。ところが、その二どめにもらったおくさんというのは、それはそれは、ふたりとない、こうまんでわがままな、いばりやでした。まえのご主人とのなかに、ふたりもこどもがあつて、つれ子をしておよめに来たのですが、そのむすめたちというのが、やはり、なにから、なにもまでおかあさんにそっくりな、いけないわがままむすめでした。

さて、この紳士しんしには、まえのおくさんから生まれた、もうひとりの若いむすめがありました。したが、それは気だてなら、心がけなら、とてもいいひとだった亡なくなった母親そっくりで、このうえないすなおな、やさしい子でした。

結婚けっこんの儀式ぎしがすむとまもなく、こんどのおかあさんは、さつそくいじわるの本ほん性をさらけ出しました。このおかあさんにとっては、腹はらちがいのむすめが、心がけがよくて、そのため、よけいじぶんの生なんだこどもたちのあらの見えるのが、なによりもがまんでききないことでした。そこで、ままむすめを台所だいどころにさげて、女中のするしごとしごとに追いつかいました。お皿を洗すすったり、おせんごしらえをしたり、おくさまのおへやのそうじから、おじようさまたちのお居間いまのそうじまで、させられました。そうして、じぶんは、うちの

てつぺんの、屋根うらの、くもの巣だらけなすみで、わらのねどこに、犬のようにまるくなつて眠らなければなりませんでした。そのくせ、ふたりのきょうだいたちは、うつくしいモザイクでゆかをしきつめた、あたたかい、きれいなおへやの中で、りっぱなかぎりのついたねだいに眠つて、そこには、頭から足のつまさきまでうつる、大きなすがたみもありません。

かわいそうなむすめは、なにもかもじつところ覚えていました。父親は、すっかり母親にまるめられていて、いつしよになつて、ごごとをいうばかりでしたから、むすめはなにも話しませんでした。それで、いいつかつたしごとをすませると、いつも、かまどの前にかがんで、消炭けしずみや灰の中にうづくまつていましたから、ままむすめの姉と妹は、からかい半分、サンドリヨン（シンデレラ）というあだ名をつけました。これは灰のかたまりとか、消炭とかいうことで、つまり、それは、「灰だらけ娘」とでもいうことになりましよう。

それにしても、サンドリヨンは、どんなに、きたない身なりはしていても、美しく着かざつたふたりのきょうだいたちにくらべては、百そうばいもきれいでしたし、まして心のうつくしきは、くらべものになりませんでした。

## 二

さてあるとき、その国の王様の王子が、さかなぶとう会をもよおして、おおぜい身分のいい人たちを、ダンスにおまねきになつたことがありました。サンドリヨンのふたりのきょうだいまも、はばのきくおとうさんのむすめたちでしたから、やはり、ぶとう会におまねきをうけていました。

ふたりは、おまねきをうけてから、それはおかしいように、のぼせあがつて、上着うわぎよ、がいとうよ、ずきんよと、まい日えりこのみに、うき身をやつしておりました。おかげで、サンドリヨンには、新しいやかいかいしごとがひとつふえました。なぜというに、きょうだいたちの着物に火のしをかけたか、袖口そでぐちにかぎりぬいたりするのは、みんなサンドリヨンのしごとだったからです。ふたりは朝から晩まで、おめかしの話ばかりしてしました。

「わたしは、イギリスかぎりのついた、赤いビロードの着物にしようとおもうのよ。」と、姉はいいました。

「じゃあ、わたしは、いつものスカートにしておくわ。けれど、そのかわり、金の花もようのマントを着るわ。そうして、ダイヤモンドの帯おびをするわ。あれは世間せけんにめったにない品物なんだもの。」

ふたりは、そのじぶん、上手じょうずでひょうばんの美容師びようしをよんで、頭のかぎりから足のくつ先まで、一分ぶのすきもなしに、すっかり、流行りゆうこうのしたくをととのえさせました。

サンドリヨンも、やはりそういうことのそうだんに、いちいち使われていました。なにしろ、このむすめは、ものよしあしのよく分かる子でしたから、ふたりのために、いっしょうけんめい、くふうしてやって、おまけに、おけしうまで手つだってやりました。サンドリヨンに髪かみをあげてもらいながら、ふたりは、

「サンドリヨン、おまえさんも、ぶとう会に行きたいとおもわないかい。」といいました。

「まあ、おねえさまたちは、わたしをからかっていらっしやるのね。わたしのようなものが、どうして行かれるのですか。」

「そうだとも、灰だらけ娘のくせに、ぶとう会なんぞに出かけて行ったら、みんなさぞ笑うだろうよ。」と、ふたりはいいました。

こんなことをいわれて、これがサンドリヨンでなかったら、ふたりの髪かみをひんまげてもやりたいとおもうところでしょうが、このむすめは、それは人のいい子でしたから、あくまでたのまれたとおり、りっぱにおけしうをしあげてやりました。ふたりのきょうだいたちは、もう、むやみとうれしくて、ふつかのあいだ、ろくろく物もたべないくらいでした。そのうえ、でぶでぶしたからだを、ほっそりしなやかに見せようとおもって、一ダースもレースをからだにまきつけました。そうして、ひまさえあれば、すがたみの前に立っていました。

やがて、待ちに待った、たのしい日になりました。ふたりは庭にわにおりて、出かけるしたくをしていました。サンドリヨンは、そのあとから、じっと見送れるだけ見送っていました。いよいよすがたが見えなくなってしまうと、いきなりそこに泣きふしてしまいました。

そのとき、ふと、サンドリヨンの洗礼式せんれいしきに立ち合った、名づけ親きょうぼの教母きょうぼが出て来て、

むすめが泣きふしているのを見ると、どうしたのだといって、たずねました。

「わたし、行きたいのです。——行きたいのです。——」こういいかけて、あとは涙で声がつまって、口がきけなくなりました。

このサンドリヨンの教母というのは、やはり妖女ようじょでした。それで、

「あなたは、ぶとう会に行きたいのでしょうか。そうじゃないの。」と聞きました。「ええ。」と、サンドリオンはさげんで、大きなため息をひとつしました。

「よしよし、いい子だからね、あなたも行かれるように、わたしがしてあげるから。」と、妖女はいいました。そうして、サンドリヨンの手を引いて、そのへやへつれて行ききました。

「裏うらの畠へ行って、かぼちやをひとつ、もぎとつておいで。」

サンドリオンは、さつそく行って、なかでもいちばんいいかぼちやをよって、妖女のところへ持つてかえりました。けれども、このかぼちやで、どうして、ぶとう会へ行けるのか、さつぱり考えがつきませんでした。

かぼちやを受けとると、妖女は、そのしんしんをのこらずくり抜いて、皮だけのこしました。それから妖女ようじょは、手に持ったつえつえで、こつ、こつと、三どたたくと、かぼちやはみるみる、金ぬりの、りっぱな馬車にかわりました。

妖女は、それから、台所だいどころのねずみおとしをのぞきに行きました。するとそこに、はつかねずみが六ぴき、まだぴんぴん生きていました。

妖女は、サンドリオンにいつけて、ねずみおとしの戸をすこしあげさせますと、ねずみたちが、うれしがって、ちよろ、ちよろ、かけ出すところを、つえつえでさわりますと、ねずみはすぐと、りっぱな馬にかわって、ねずみ色の馬車馬が六とう、そこにできました。けれども、まだ御者ごしやがありませんでした。

「わたし行って、見て来ましょう。大ねずみが、まだ一ぴきかかっているかもしれないから。それを御者にしてやりましょう。」

「それがいいわ。行ってごらん。」と、妖女はいいました。

サンドリオンは行って、ねずみおとしを持って来ましたが、そのなかに、三ぴき、大ねずみがいきました。妖女は三ぴきのうちで、いちばんひげのりっぱな大ねずみをより出して、つえでさわって、ふとった、元気のいい御者にかえました。それはめつたに見られない、ぴんとした、りっぱな口ひげをはやしていました。それがすむと、妖女ようじょは、サンドリ

ヨンにむかつて、

「もういちど、裏のお庭へ行つて、じよろのうしろにかくれているとかげを六ぴき、見つけていらつしやい。」といいました。

サンドリオンは、いいつけられたとおり、とかげをとつてかえりますと、妖女はすぐ、それを六人のべつとうにかえてしまいました。それは、金や銀のぬいはくのある、ぴかぴかの制服を着て、馬車のうしろの台にのりました。そうして、そこに、ぺったりへばりついたなり、押しつくらしていました。そのとき、妖女は、サンドリオンにいいました。「ほら、これでダンスに行くお供ぞろいができたでしょう。どう、気に入って。」「ええ、ええ、気に入りましたとも。」と、サンドリオンは、うれしそうにさげびました。「けれどわたし、こんなきたないぼろを、着て行かなければならないでしょうか。」妖女はそこで、ほんのわずか、つえの先で、サンドリオンのからだにさわったとおもつと、みるみる、つきはぎだらけの着物は、宝石をちりばめた金と銀の着物にかわつてしまいました。それがすむと、妖女はサンドリオンに、それはそれは美しいリスの皮の上ぐつ（ガラスの上ぐつだともいいいます。）を、一そくくれました。

こうして、のこらずしたくができあがつて、いよいよサンドリオンが馬車にのろうとしたとき、妖女はあらためて、サンドリオンにむかつて、なにはおいても、夜なか十二時すぎまで、ぶとう会にはならないと、きびしくいいわたしました。十二時から一分でもおけると、馬車はまたかぼちやになるし、馬は小ねずみになるし、御者は大ねずみになるし、べつとうはとかげになるし、着ている着物も、もとのとおりのぼろになるのだから、といつてきかせました。

サンドリオンは、妖女に、けつして夜なかすぎまで、ぶとう会にはいませんという、かたいやくそくをしました。そうして、もうはち切れそうなうれしさを、おさえることができないようなふうで、馬車にのりました。

三

さて、王子は、その晩、たれも知らない、どこぞのりっぱな王女が、いましたが馬車のつて、ぶとう会についたという知らせを聞いて、わざわざ迎えに出て来ました。王子

は、王女が馬車からおりると、その手をとって広間の、みんなおおぜい居る中へ案内して来ました。すると、広間の中はたちまち、しんと静まりかえって、みんなダンスをやめました。バイオリンの音もしなくなりしました。それは、このめずらしいお客さまの美しさに、たれもかれも気をとられて、ぼんやりしてしまっただけでした。そのなかで、ただかすかに、こそこそ、ささやく声がして、

「ほう、きれいだなあ。ほう、きれいだなあ。」とばかり、いつていました。

王様も、もうお年はとつておいででしたけれど、そのときは、おもわずサンドリヨンの顔を、じつとながめずにはいられませんでした。そうして、そつとお妃の耳もとにささやいて、

「こんなきれいな、かわいらしいむすめを見るのは、久しぶりだ。」と、いつておいでになりました。

貴婦人たちは、貴婦人たちで、みんなじろじろと、サンドリヨンの着物から、頭のかざりものをしらべてみて、まあ、まあ、あれだけのりっぱな材料と、それをこしらえるりっぱな職人とさえあれば、あしたにもさつそく、この型で、じぶんもこしらえさせてみよう、と考えていました。

王子は、サンドリヨンを、そのなかでいちばん名譽の上席へ案内して、それからまたつれ出して、いっしょにダンスをはじめました。

サンドリヨンは、それはそれは、しとやかにおどつたので、みんなは、いよいよびっくりしてしまいました。さて、けつこうなごちそうが、まもなく出ましたが、若い王子は、サンドリヨンの顔ばかりながめていて、ひとつものどにはとおりませんでした。

サンドリヨンはやがて、じぶんのきょうだいたちのいるところへ出かけて行って、そのそばに腰をかけて、王子からもらったオレンジや、レモンを分けてやったりして、それは、いろいろやさしいそぶりをみせました。けれど、ふたりは、それがたれだか分からなかつたものですから、ただもうびっくりして、目ばかりくるくるさせていました。サンドリヨンは、こうしてきょうだいたちのごきげんをとっているうちに、時計が十二時十五分前を打ちました。するといきなり、サンドリヨンは、ほかのお客たちに、ていねいにあいさつをして、ふいと出て行ってしまいました。

さて、うちへかえると、サンドリオンは、そこに待っていた妖女ようじよにあつて、たくさんお礼をいったのち、あしたもまた、ぜひぶとう会へやってくださいといつてたのみました。それは、王子の熱心ねっしんなおのぞみであつたからです。

こうして、サンドリオンが、ぶとう会であつたことを、妖女にせつせと話をしていますと、やがて、ふたりのきょうだいがかえつて来て、こつ、こつ、戸をたたきました。サンドリオンは、かけて行つて、戸をあけてやりました。

「まあ、ずいぶん長く行つていらしたのね。」と、サンドリオンはさげんで、あくびをして、目をこすつて、のびをしました。それは、うたたねをしていて、たつた今、目がさめたというようなふうでした。けれど、じつはふたりが出て行つてから、サンドリオンは、まるつきりねたくもねられない気持だつたのです。

「おまえさん、ダンスに行つたら、それはたいくつなんぞしなかつたらうよ。なにしろ、あそこへは、まあ、世の中に、こんなきれいな人があるかと思うほど、美しいお姫ひめさまが来なすつたのだよ。その方が、わたしたちに、いろいろとやさしいことをおつしやつて、ごらん、こんなにレモンだの、オレンジだのをくださつたのだよ。」と、きょうだいのひとりがいいました。

サンドリオンは、そんなことには、いつこうむとんじやくなようすでした。もつとも、きょうだいたちに、そのお姫さまの名をたずねましたが、ふたりは、それは知らないといいました。そうして、王子様がそのことで、たいそうむちゆうにおなりになつて、その名を、とても知りたがつて、みんなにたずねておいでだつたという話をしました。そう聞くと、サンドリオンはにっこりして、

「まあ、その方、どんなにお美しいでしょうね。ねえさまたち、いらして、ほんとうによかつたのね。わたし、その方見られないかしら。まあねえ、ジャボットねえさま、あなたのまい日着ていらつしやる、黄いろい着物を、わたしにかしてくださらないこと。」といいました。

「まあ、あきれた。」と、ジャボットはさげびました。「わたしの着物を、おまえさんのようなきたならしい、灰のかたまりなんかに、かしてやられるもんか。ひとをばかにしている



よ。」

サンドリオンは、いずれそんな返事だろうとおもっていましたが、そのとおりにことわられたのを、かえってありがたいとおもってしまいました。なぜといって、きょうだいがじょうだんをいったのを真まにうけて、着物をかしてくれたら、どんなになさげなくおもったでしょう。

## 五

さて、そのあくる日も、ふたりのきょうだいは、ぶとう会へ出かけて行きました。サンドリオンもやはり、こんどは、もっとりっぱに着かぎって、出かけて行きました。王子はしじゅうサンドリオンのそばにつきつきりで、ありったけのおせじや、やさしいことばをかけていました。それがサンドリオンには、うるさいどころではありませんでしたから、つかうか、妖女ようじょにいましめられていたことも忘れていました。それですから、まだまだ時計が十一時だと思ったのに、十二も打ったのでびっくりして、ついと立ちあがって、めじかのようにはしっこくかけ出しました。王子もすぐあとを追いかけてまが、とうとう追いつきませんでした。けれど、サンドリオンも、あわてたまぎれに、金の上うわぐつを片足落しました。それを王子は大事にしまっておきました。サンドリオンは、うちにかえりはかえりましたが、すっかり息を切らしてしまいました。もう馬車も、べつとうもなく、また、いつもの古着のぼろぼろにくるまったなり、ただ片足だけはいてかえった、金の上ぐつを持っていました。

さて、サンドリオンが出て行ったあとで、王様のお城の番小屋へ、おたずねがありました。

「お姫ひめさまが、ひとり、門を出て行くところを見なかったか。」  
ところが、番兵の返事は、

「はい、見たのはただひとり、ひどくみすばらしいなりをした若いむすめでした。それは貴婦人きふじんどころか、ただのいなかむすめとしか、おもわれないふうをしていました。」というのでした。

さて、ふたりのきょうだいが、ぶとう会からかえってくると、サンドリオンは、こう

いって聞きました。

「たんとおもしろいことがありましたか。きれいなお姫さまは、きょうも来ましたか。」  
ふたりがいうには、

「ああ、けれども、その人ったら、十二時を打つといっしよに、あわてて逃げだしたよ。あんまりあわてたものだから、金の上ぐつうぐつを、片足落して行ったのさ。その上ぐつうぐつの、かわいらしいことといっしてはないものだから、王子は、それをしまっておきなされた。王子はぶとう会でも、しじゅうお姫ひめさまのほうばかり見ていらした。きつと、王子は、金の上ぐつうぐつをはいているきれいなひとを、すいていらっしやるにちがいないよ。」

## 六

なるほど、ふたりのいったとおりにちがいはありませんでした。それから二三日すると、王子はラツパを吹いておふれをまわして、その金の上ぐつうぐつの、しつくり足にはまるむすめをさがして、お妃にするといわせました。そうして、王子は、家来けらいたちに、その金の上ぐつうぐつを持たせて、王女たちから貴族きぞくのお姫ひめさまたち、それから御殿じゅう、のこらずの足をためさせてみました。みんなだめでした。

さて、とうとうまわりまわって、金の上ぐつうぐつは、いじのわるい、ふたりのきょうだいたちのところにもわって来ましたから、ふたりとも赤くなって、むりに足をつっこもうとしましたが、どうして、どうして、それはみんな、気のどくな、むだな骨おりでした。  
サンドリオンは、そのとき、わきで見えていますと、それはなんのこと、じぶんの半分おとしてきた上ぐつうぐつでしたから、ついわらい出してしまつて、

「かしてくださらない。わたしの足にだつてあうかもしれないから。」といいました。  
すると、ふたりのきょうだいは、ぷつと吹き出して、サンドリオンをからかったり、あざけつたり、いじわるく追いだそうとかかりました。けれど、金の上ぐつうぐつを持ったお役人は、じつとサンドリオンの顔を見て、これはめずらしく美しいむすめだとおもいましたから、たとえ、たれでも、ためすだけは、ためしてみなければならぬ、それが王子様のおいつけだといいました。

そこで、サンドリオンに腰をかけさせて、上ぐつうぐつを、その足にはかせますと、それはす

るりと、ぐあいよくはいつて、まるでろうでかためたように、ぴったりくつついてしまいました。ふたりのきょうだいは、そのとき、どんなにびっくりしたでしょう。どうして、それどころか、サンドリオンは、かくしの中から、もう片かたの上ぐつを出して見せました。ちやうどそのとき、サンドリオンの教母きょうぼの妖女ようじよがすぐあらわれて、杖で、サンドリオンの着物にさわりますと、こんどは、まえよりもまた、いっそう美しい、りっぱな着物にかわりました。

それで、ふたりのきょうだいは、あのぶとう会で見た美しいお姫ひめさまが、サンドリオンであったことが分かりました。ふたりは、サンドリオンの足もとにつつぶして、これまでひどい目にあわせた罪つみをわびました。サンドリオンは、ふたりの手をとっておこして、やさしくだきしめました。そして、これまでふたりのしたことは、なんともおもわない。そのかわり、これからは、やさしくしてくれるようにといいました。

サンドリオンは、りっぱな着物を着たまま、王子の前へつれて行かれました。王子は、それで、いよいよサンドリオンがすきになって、それから四、五日して、めでたくご婚こん礼れいの式しきをあげました。

サンドリオンは、顔が美しいように、心のやさしいむすめでしたから、ふたりのきょうだいを、お城へ引きとってやって、ご婚こん礼れいのその日に、やはり、ふたりの貴族きぞくにめあわせることにしました。

顔とすがたの美しいことは、男にも女にも、とうといたからです。でも、やさしく、しおらしい心こそ、妖女のこの上ないおくりものだということを知らなくてはなりません

# ジャックと豆の木

楠山正雄訳

一

むかしむかし、イギリスの大昔、アルフレッド大王の御代のことです。ロンドンの都からと置くはなれたいなかのこやに、やもめの女のひとが、ちいさいむすこのジャックをあいてに、さびしくくらししていました。かけがえのないひとりむすこですし、それに、ずいぶんのんきで、ずぼらで、なまけものでしたが、ほんとうは気だてのやさしい子でしたから、母親は、あけてもくれても、ジャック、ジャックといって、それこそ目の中でも入れてしまいたいくらいにかわいがって、なんにもしごとはさせず、ただ遊ばせておきました。

こんなふうで、のらくらむすこをかかえた上に、このやもめの人は、どういうものか運がわるくて、年年ものが足りなくなるばかり、ある年の冬には、もう手まわりの道具や衣類いるいまで売って、手に入れたおかねも、手内職てないしよくなんかして、わずかばかりかせぎためたおかねも、きれいにつかってしまつて、とうとう、うちの中で、どうにかおかねになるものといつては、たった一ぴきのこった牝牛めうしだけになつてしまいました。

そこで、ある日、母親は、ジャックをよんで、

「ほんとうに、おかあさんは、自分のからだを半分もつて行かれるほどつらいけれど、よいよ、あの牝牛を、手ばなさなければならぬことになったのだよ。おまえ、ごくろうだけれど、市場いちばまで牛をつれて行って、いいひとをみつけて、なるたけたかく売って来

ておくれな。」といいました。

そこで、ジャックは、牛をひっぱって出かけました。

しばらくあるいて行くと、むこうから、肉屋の親方がやって来ました。

「これこれ坊や、牝牛なんかひっぱって、どこへ行くのだい。」と、親方は声をかけました。

「売りに行くんだよ。」と、ジャックはこたえました。

「ふうん。」と、親方はいいながら、片手にもった帽子をふってみせました。がさが音がするので、気がついて、ジャックが、帽子のなかを、ふとのぞいてみますと、きみょうな形をした豆が、袋の中から、ちらちらみえました。

「やあ、きれいな豆だなあ。」

そうジャックはおもって、なんだか、むやみとそれがほしくなりました。そのようすを相手の男は、すぐと見つけてしまいました。そして、このすこしたりない<sup>、</sup>こともを、うまくひっかけてやろうとおもって、わざと袋の口<sup>くち</sup>をあけてみせて、

「坊<sup>ぼう</sup>や、これがほしいんだろう。」といいました。

ジャックは、そういわれて、大にこになると、親方はもったいらしく首をふって、「いけない、いけない、こりやあふしぎな、魔法の豆さ。どうして、ただではあげられない。どうだ、その牝牛と、とりかえっこしようかね。」といいました。

ジャックは、その男のいうなりに、牝牛と豆の袋ととりかえっこしました。そして、おたがい、これはとんだもうけものをしたとおもって、ほくほくしながら、わかれました。

ジャックは、豆の袋をかかえて、うちまでとんでかえりました。うちへはいるか、はいらないに、ジャックは、

「おかあさん、きようはほんとに、うまく行ったよ。」と、いきなりそういつて、だいとくいで、牛と豆のとりかえっこした話をしました。ところが、母親は、それをきいてよろこぶどころか、あべこべにひどくしかりました。

「まあ、なんというばかなことをしてくれたのだね。ほんとにあきれてしまう。こんなつまらない、えんどう豆の袋なんかにつられて、だいじな牝牛一ぴき、もとも子もなくなってしまうなんて、神さま、まあ、このばかな子をどうしましょう。」

母親はぶんぶんおこって、いまいましそうに、窓のそとへ、袋の中の豆をのこらず、なげすててしまいました。そして、つくづくなさけなさそうに、しくんしくん、泣きだしま

した。

きつとよろこんでもらえるとおもっている、あべこべに、うまれてはじめて、おかあさんのこんなにおこった顔をみたので、ジャックはびつくりして、じぶんもかなしくなりました。そして、なんにもたべるものがないので、おなかのすいたまま、その晩ははやくから、ころんとねてしまいました。

そのあくる朝、ジャックは目をさまして、もう夜があげたのに、なんだかくらいなおもつて、ふと窓のそとをみました。するとどうでしょう、きのう庭になげすてた豆の種子たねから、芽が生えて、ひと晩のうちに、ふとい、じょうぶそうな豆の大木が、みあげるほどたかくのびて、それこそ庭いっぱい、うっそうとしげっているではありませんか。びつくりしてとびおきて、すぐと庭へおりてみますと、どうして、たかいといって、豆の木は、それこそほうずのしれないたかさに、空の上までものびていました。つると葉とがからみあって、それは、空の中をどんとつきぬけて、まるで豆の木のはしごのように、しっかりと立っていました。

「あれをつたわって、てっぺんまでのぼって行ったら、ぜんたいどこまで行けるかしら。」

そうおもって、ジャックは、すぐとはしごをのぼりはじめました。だんだんのぼって行くうち、ジャックの家は、ずんずん、ずんずん、目の下でちいさくなって行きました。そしていつのまにか見えなくなってしまうました。それでもまだてっぺんには来ていませんでした。ジャックは、いったいどこまで行くのかとおもって、すこしきみがわるくなりました。それでもいっしょうけんめい、はしごにしがみついて、のぼって行きました。あまりたかくのぼって、目はくらむし、手も足もくたびれきって、もうしびれて、ふらふらになりかけたころ、やっとてっぺんにのぼりつきました。

ジャックは、そのとき、まずそこらを見まわしました。すると、そこはふしぎな国で、青あおとしげった、しずかな森がありました。うつくしい花のさいている草原もありました。水晶すいしゅうのようにきれいな水のながれている川もありました。こんなたかい空の上

に、こんなきれいな国があるうとは、おもってもいませんでしたから、ジャックはあつげにとられて、ただきよとんとしていました。

いつもまにか、ふと、赤い角かくずきんをかぶった、みような顔のおばあさんが、どこから出て来たか、ふと目の前にあらわれました。ジャックは、ふしぎそうに、このみような顔をしたおばあさんを見つめました。おばあさんは、でも、やさしい声でいいました。「そんなにびっくりしないでいいのだよ。わたしはいいたい、お前さんたち一家いっかのものを守ってあげている妖女ようじよなのだけれど、この五、六年のあいだというものは、わるい魔法まほうのために、魔法でしばらくられていて、お前さんたちをたすけてあげることができなかったのさ。だが、こんどやつと魔法がとけたから、これからはおもしろいままに、助たすけてあげられるだろうよ。」

だしぬけに、こんなことをいわれて、ジャックは、なおさらあつげにとられてしまいました。そのぼかんとした顔を、妖女はおもしろそうにながめながら、そのわけをくわしく話しました。それをかいつまんでいうと、まあこんなものでした。

「ここからそうとくくはない所に、おそろしい鬼の大男が、すみかにしている、お城のよな家がある。じつはその鬼が、むかし、そのお城に住んでいたお前のおとうさんをころして、城といっしょに、そのもっていたおたからのこらずとってしまったものだから、お前のうちは、すっかり貧乏びんぼうになってしまったのさ。そうしてお前も、赤ちゃんのとぎから、かわいそうに、お前のおかあさんのふところにだかれたまま、下界げかいにおちぶれて、なさけないくらしをするようになったのだよ。だから、もういちど、そのたからをとりかえして、わるいその鬼を、ひどいめにあわしてやるのが、お前のやくめなのだよ。」  
こういうふうにいいきかされると、ぐうたらなジャックのこころも、ぴんと張はつてきました。知らないおとうさんのことが、なつかしくなつて、どうしてもこの鬼をこらしめて、かすめられたたからを、とりかえさなくてはならないとおもいました。そうおもつてとてもいさましい気になつて、おなかのすいていることも、くたびれていることも、きれいにわすれてしまいました。そこで、妖女にお礼をいってわかれますと、さつそく、鬼の住んでいるお城にむかつて、いそいで行きました。

やがて、お日さまが西にしずむころ、ジャックは、なるほどお城のように大きな家の前に来ました。

まず、とんとんと門をたたくと、なかから、目のひとつしかない、鬼のお上かみさんが出て

来ました。きみのわるい顔に似合わず、鬼のお上さんは、ジャックのひもじそうなようすをみて、かわいそうにおもいました。それで、さもこまったように首をふって、「いけない、いけない。きのどくだけれど、とめてあげることにはできないよ。ここは、人くい鬼のうちだから、みつかるよ、晩のごはんのかわりに、すぐたべられてしまうからね。」といいました。

「どうか、おばさん、知れないようにしてとめてくださいよ。ぼく、もうくたびれて、ひと足もあるけないんです。」と、たのむように、ジャックはいいました。

「しかたのない子だね。じゃあ今夜だけとめてあげるから、朝になったら、すぐおかえりよ。」

こういつているさいちゆう、にわかにならずしん、ずしん、地ひびきするほど大きな足音がきこえて来ました。それは主人の人くい鬼が、もう、そこからかえって来たのです。鬼のお上さんは、大あわてにあわてて、ジャックを、だんろの中にかくしてしまいました。

鬼は、へやの中にはいると、いきなり、ふうと鼻をならしながら、たれだつてびっくりしてふるえ上がるような大ごえで、

「フン、フン、フン、

イギリス人の香がするぞ。

生きていようが死んでよが、

骨ごとひいてパンにしよぞ。」

と、いいました。すると、お上さんが、

「いいえ、それはあなたが、つかまえて、土の牢ろうに入れてあるひとたちの、においでしよう。」といいました。

けれど鬼の大男は、まだきよろきよろそこらを見まわして、鼻をくくんくんやっています。でも、どうしても、ジャックをみつけることができませんでした。

とうとうあきらめて、鬼は、椅子いすの上に腰こしをおろしました。そしてがつがつ、がぶがぶ、たべたりのんだりしはじめました。そつとジャックがのぞいてみてみますと、それはあとからあとから、いつおしまいになるかとおもうほどかっこむので、ジャックは、目ばかりまるくしていました。さて、たらふくたべてのんだあげく、お上さんに、



「おい、にわとりをつれてこい。」といいつけました。

それは、ふしぎなめんどりでした。テーブルの上ののせて、鬼が、

「生め。」といいますと、すぐ金のたまごをひとつ生みました。鬼がまた、

「生め。」といいますと、またひとつ、金のたまごを生みました。

「やあ、ずいぶん、とくなにわとりだな。おとうさんのおたからというのは、きつとこれにちがいない。」と、下からそつとながめながら、ジャックはそうおもいました。

鬼はおもしろがって、あとからあとから、いくつもいくつも、金のたまごを生ましているうち、おなかのはってねむたくなつたとみえて、ぐすぐすと壁かべのうごくほどすごい大いびきを立てながら、ぐっすりねこんでしまいました。

ジャックは、鬼のすつかりねむつたのを見すまして、ちようど鬼のお上さんが、台所へ行っているのをさいわい、そつとだんろの中からぬけだしました。そして、テーブルの上のめんどりを、ちよろり小わきにかかえて、すたこらお城を出て行きました。

それから、どンドン、どンドン、かけだして行って、豆の木のはしごのかかっている所までくると、するするとつたわっておりて、うちへかえりました。

ジャックのおかあさんは、むすこが、鬼か魔女にでもとられたのではないかと心配していますと、ぶじでひよっこりかえつて来たので、とても大きわざしてよろこびました。それからは、ジャックのもつてかえつた、金のたまごを生むにわとりのおかげで、おや子はお金もちにもなりましたし、しあわせにもなりました。

### 三

しばらくすると、ジャックはまた、もういちど空の上のお城に行つてみたくなりました。そこで、こんどは、すつかり先せんとちがつたふうをして、ある日、豆の木のはしごを、またするするとのぼつて行きました。鬼のお城に行つて、門をたたくと、鬼のお上さんが出てきました。ジャックが、またかなしそうに、とめてもらいたいといつて、たのみますと、お上さんは、まさかジャックとは気がつかないようでしたが、それでも手をふつて、「いけない、いけない。この前も、お前とおなじような貧乏たらしいこどもをとめて、主人のだいじなにわとりを、ちよつくらもつて行かれた。それからはまい晩、そのことをい

いだして、わたしが、しかられどおし、しかられているじゃないか。またもあんなひどいめにあうのはこりこりだよ。」といいました。

それでも、ジャックは、しつっこくたのんで、とうとう中へ入れてもらいました。するうち、大男がかえって来て、また、そこらをくくんかいでまわりましたが、ジャックはあかがねの箱の中にかくれているので、どうしてもみつかりませんでした。

大男は、この前とおなじように、晩ばんの食事をたらふくやったあとで、こんどは、金のたまごをうむにわたりの代りに、金や銀のおたからのたくさんつまった袋を出させて、それをざあっとテーブルの上にあけて、一枚一枚かぞえてみて、それから、おはじきでもしてあそぶように、それをチャラチャラいわせて、さんざんあそんでいましたが、ひとりおりのしむと、また袋の中なかにしまつて、ひもをかたくしめました。そして、天井にひびくほどの大あくび、ひとつして、それなりぐうぐう、大いびきでねてしまいました。

そこで、こんども、ジャックは、そろりそろり、あかがねの箱からはいだして、金と銀のおたからのいっぱいつまった袋を、両方の腕うでに、しつかりかかえるがはやいか、さつさとにげだして行きました。ところが、この袋の番人に、一ぴきの小犬こいぬがつけてあったので、そいつが、とたんに、きやんきやん吠ほえだしました。

ジャックは、こんどこそだめだとおもいました。それでも、大男は、とても死んだようによくね入いっていて、目をさましませんでした。ジャックはむちゆうで、あとをもみずにごんごん、どんごん、かけて行って、とうとう豆の木のはしごに行きつきました。

さて、にわとりとちがって、こんどはおもたい金と銀の袋をはごぶのに、ほねがおれました。それでもがまんして、うんすら、うんすら、ふつかがかりで、豆の木のはしごを、ジャックはおりました。

やつとこさ、うちまでたどりつくくと、おかあさんは、ジャックがいなくなったので、すっかり、がっかりして、ひどい病人びやうじんになって、戸をしめてねていました。それでも、ぶじなジャックの顔を見ると、まるで死んだ人が生きかえったようになって、それからずんずんよくなって、やがて、しゃんしゃんあるきだしました。その上、お金がたくさんできたときいて、よけいげんきになりました。

こうして、またしばらくの間、ジャックは、うちで、おとなしくしていました。するうち、だんだん、からだじゆう、むずむずして来ました。もうまた天上てんじょうしたくなって、まいにち、豆の木のはしごばかりながめていました。するとそれが気になって、気になって、気がふさいで来ました。

そこで、ジャックは、ある日また、そつと豆の木のはしごをつたわつてのぼりました。こんども顔から姿から、すっかりほかのこどもになって行きましたから、鬼のお上さんは、まただまされて、中に入れました。そして、大男がかえると、あわてて、お釜かまのなかにかくしてくれました。

鬼の大男は、へやの中じゆうかぎまわつて、ふん、ふん、人くさいぞといいました。そして、こんどは、なんでもさがしだしてやるといつて、へやの中のを、ひとつひとつみてまわりました。そしてさいごに、ジャックのかくれているお釜のふたに手をかけました。ジャックは、ああ、こんどこそだめだとおもつて、ふるえていますと、それこそ妖女がまもつていてくれるのでしうか、大男は、ふと気がかわつて、それなりろばたにすわりこんで、

「まあいいや。はらがすいた。晩飯にしようよ。」といいました。

さて、晩飯がすむと、大男はお上さんに、

「にわとりはとられる、金の袋、銀の袋はぬすまれる、しかたがない、こん夜やはハーブでもならずかな。」といいました。

ジャックが、そつとお釜のふたをあけてのぞいてみますと、玉でかざつた、みごとなハーブのたて琴ことが目にはいりました。

鬼の大男は、ハーブをテーブルの上ののせて、「なりだせ。」といいました。

すると、ハーブは、ひとりでになりだしました。しかもその音ねのうつくしいことといつたら、どんな楽器がっきだつて、とてもこれだけの音ねにはひびかないほどでしたから、ジャックは、金のたまごのにわとりよりも、金と銀とのいっばいつまつた袋よりも、もつともつと、このハーブがほしくなりました。

するうち、ハープの音楽を、たのしい子守うたにして、さすがの鬼が、いい心もちにねむってしまった。ジャックは、しめたとおもって、そっとお釜の中からぬけだすと、すばやくハープをかかえてにげだしました。ところが、あいにく、このハープには、魔法がしかけてあつて、とたんに、大きな声で、

「おきろよ、だんなさん、おきろよ、だんなさん。」と、どなりました。

これで、大男も目をさしました。むうんと立ち上がつてみると、ちっぽけな小僧が、大きなハープを、やつこらさとかかえて、にげて行くのがみえました。

「待て小僧、きさま、にわとりをぬすんで、金の袋、銀の袋をぬすんで、こんどはハープまでぬすむのかあ。」と、大男はわめきながら、あとを追っかけました。

「つかまるならつかまえてみる。」

ジャックは、まげずにどなりながら、それでもいっしょうけんめいかけました。大男もお酒によつた足をふみしめふみしめ、よたよたはしりました。そのあいだ、ハープは、たえず、からんからん、なりつづけました。

やつとこさと、豆の木のはしごの所までくると、ジャックは、ハープにむかつて、「もうやめろ。」といいますと、それなりハープはだまりました。ジャックは、ハープをかかえて、豆の木のはしごをおりはじめました。はるか目の下に、おかあさんが、こやの前に立って、泣きはらした目で、空をみつめていました。

そうこうするうち、大男が追つついてきて、もう片足、はしごにかけました。

「おかあさん、お泣きでない。」と、ジャックは、上からせいっぱいよびました。

「それよか、斧おのをもつてきておくれ。はやく、はやく。」

もう一分もまたれません。大男はみしり、みしり、はしごをつたわつて来ます。ジャックは、気が気ではありません、身のかるいのをさいわいに、ハープをかかえたなり、はしごの途中とちゅう、つばめのようなはやわざで、くるりとひっくりかえつて、たかい上からとびおりました。そこへおかあさんが、斧をもつてかけつけたので、ジャックは斧をふるって、いきなり、はしごの根もとから、ぷつぷり切りはなしました。そのとき、まだ、はしごの中ほどをおりかけていた大男が、切れた豆のつるをつかんだまま、大きなからだのおもみで、ずしんと、それこそ地びたが、めりこむような音を立てて、落ちてきました。そして、それなり、目をまわして死んでしまいました。

ちようどそのとき、いつぞや、はじめてジャックにあつて、道をおしえてくれた妖女

が、こんどはまるでちがつて、目のさめるように美しい女の人の姿になって、またそこへ出て来ました。きらびやかに品のいい貴婦人きふじんのような身なりをして、白い杖を手にもっていました。杖のあたまには、純金じゆんきんのくじやくを、とまらせていました。そしてふしぎな豆が、ジャックの手にはいるようになったのも、ジャックをためすために、自分  
がはからってしたことだといって、

「あのとき、豆のはしごをみて、すぐとそのまま、どこまでものぼって行こうという気をおこしたのが、そもそもジャックの運のひらけるはじめだったのです。あれを、ただぼんやり、ふしぎだなとおもってながめたなり、すぎてしまえば、とりかえっこした牝牛めうしは、よし手にもどることがあるにしても、あなたたちは、あいかわらず貧乏でくらさなければならぬ。だから、豆の木のはしごをのぼったのが、とりもなおさず、幸運のはしごをのぼったわけなのだよ。」

と、ここの妖女は、いいきかせて、ジャックにも、ジャックのおかあさんにもわかれて、かえって行きました。

# ラ・ベルとラ・ベート（美し姫と怪物）

ヴィルヌーヴ夫人 Madame de Villeneuve  
楠山正雄訳

むかし昔、ある所に、お金持の商人しょうにんがいて、三人のむすこと三人のむすめと、つごう六人のこどもをもっていました。商人には、お金よりもこどものほうが、ずっとずっとだいじなので、こどもたちたれも、かしこくしあわせにそだつように、そればかりねがっていました。

三人のむすめたち、たれも、きれいに生まれついてきているなかで、いちばん末の女の子は、きれいというだけではたりない、それこそ照りかがやくように美しくて、まだ三つ四つのおさな子のときから、ラ・ベルーうつく美し姫とよばれていたのが、大きくなるにしたがい、美人ということばは、このむすめひとりのためになるようになりました。顔かたちの美しいばかりでなく、心のすなおで善いよこのむすめとはうらはらで、ふたりの姉たちは、あいにく、いじわるでねじけていて、妹の美しい美しいとほめられるのがにくらしくてなりませんでした。それに、この姉たちは、いばりやで見え坊ほうで、世界一大金持のようにおもい上がって、ほかの商人たちのなかまを見下みくだしながら、侯爵こうしゃくとか伯爵はくしゃくとか貴族きぞくのやしきによばれて、ぶとう会やお茶の会のなかまになることを、この上ないめいよにおもっていました。そして、妹のラ・ベルが、いつもうちにひっこんでいて、つつましくおとうさまに仕つかえているのを、「あの子はほかだから。」といってあざけりました。なにしろ、うちがお金持なので、むすめさんをおよめにといつてくるものは、

ことわりきれないほどありましたが、上の姉たちは、自分より上の身分のもののほか、まるで相手にしませんでしたし、末の妹は、まだわたしはこどもで、とうぶん、なくなった母の代りに、父の世話をしてあげたいとおもいますからといってことわりました。

ところで、人間の身の上はいつどうかわるかわかりません。さしも大金持だった商人が、ふとしたつまづきで、いっぺんに財産をなくしてしまい、のこったものは、いなかのささやかな住居ばかりということになりました。そこで商人は、三人の男の子に言いふくめて、てんでん、ひろい世間へ出て、その日その日のパンをかせがせることにしましたが、女の子たちのうち、ふたりの姉は、自分たちは町におおぜい、ちやほやしてくれる男のお友だちがあつて、いくらびんぼうになつても、きつとそのひとたちは見捨てずにいてくれると、いばつていました。けれど、いざとなると、たれも知らん顔をして、よりつこうともしないどころか、これまでお金のあるのを鼻にかけて、こうまんにふるまつていたものが、そんなぎまになつて、いいきみだといつてわらいました。それとはちがつて、末のむすめのことは、たれも気のどくがつて、びた一文もたないのはしようちで、ぜひおよめに来てもらいたいという紳士は、あとからあとからとたえませんでした。が、むすめは、こうなると、よけいおとうさまのそばをはなれることはできないとおもつて、どんな申込もことわりました。

こんなしないで、一家は、いやおうなし、いなかのちいさな家にうつりました。そして三人の男の子は、一日外に出て、すこしばかりある土地を耕して、お百姓のしごとにいそしみました。末のむすめは、まい朝四時から起き出して、うちじゅうの朝飯をこしらえました。これは、はじめのうちたれも手つだつてくれるものはなし、ずいぶんつらいしごとでした。でも、馴れるとなんでもなくなりました。それで、ひとしきり片づくつと、むすめは、本をよんだり、ハーブシコード(ピアノに似た昔の楽器)をならしたり、糸車をまわしたりしました。ふたりの姉むすめはというと、よくよくうまれつきのなまけものらしく、朝もおひる近くなつてやつとおき出して、外へ出ることも、遊びに行く所もないので、一日ただだらしくねそべつて、ふくれつらして、ぶつぶつ口小言ばかりいつていました。それで、妹のたのしそうに、せつせとはたらいっているそばで、この子は女中のことしかできないのじゃないか、とけいべつするようになっていました。

こんなことで、どうにか一年立ちました。するとある日、町からしらせがとどいて、難船したとおもつた商人の持ち船が、にもつを山とつんだまま、ぶじに港へ入つて来た

ということが分かりました。さあ、うち中の大よろこびといってはありません。なかでもふたりの姉むすめは、あしたにももう、いやないなかをはなれて、町の大きな家へかえられるといつて、はしやいでいました。そして、もうさつそくに、きょう、町へ出たら、きものと身の飾りかぎのこまものを、買って来てくれるように、父親にせがみました。

「それで、ラ・ベルちゃん、お前さんは、なんにも注文ちゅうもんはないのかい。」と、父はいいました。

「そうですね、せつかくおつしやつてくださるのですから、では、ばらの花を一りん、おみやげにいただきましょう。このへんには、一本もばらの木がありませんから。」と、むすめはいいました。べつだん、ばらの花のほしいわけもなかったのですが、姉たちがわいわいいうなかで、自分ひとり、りこうぶつて、わざとなかまはずれになっていると、おもわれたくないからでした。

さて、いさんで町へ出て行ったものの、いろいろめんどうな訴そしよう事件じけんになって、船にもつは、そつくりとり上げられ、商人は、出かけたときよりも、もつとびんぼうになって、またとぼとぼ、いなかの家へかえって行くほかはありませんでした。あいにく冬で、もうあと、うちまで十五里という所まで来て、日はとつぷりくれる、道は雪でうずまつてしまいました。おまけに、大きな森ひとつとおりぬけなければなりません。さむさはさむし、おなかはずく、商人は、もうこのままここで、行きだおれになるかとおもいました。

するうちふと、ながい並木道なみきみちのはるかむこうに、ぽつんとひとつ、火あかりがみえました。商人は、ほつとしながら、のっていた馬のくびを並木道のほうへむけて、道のつきる所まで行ってみますと、あんがいにも、そこに、すばらしくりっぱな御殿が立っていました。しかも、窓からは、赤あかとあかりがさしていながら、中には人ひとりいるけいはいがありません。戸をたたいてみても、庭にまわってみても、やはりしんかんとしていました。そのあいだに、のつてきた馬だけが、うまやの戸のあいっているすきからはいりこんで、まぐさ槽おけのほし草やからす麦を、がつかつしてたべていました。商人は、馬をのこして、自分だけそつと、中へはいつてみましたが、やはり、たれも出てくるものも、声をかけるものもありません。そのくせ、炬たの火はかんかんもえていて、テーブルには、ちやんと一人前のごちそうと、お酒のしたくがしてありました。

商人は、なにしろ肌はだの下まで雪がしみとおっていたので、かまわず炬たの火でからだを



かわかしながら、ひとり言ことのようにいいました。

「ごめん下さい。いずれ出ておいでになることとおもいますが、このおうちの主人さまなり、お召使の方なり、どうか火にあたらせていただきます。」

こういつて、しばらく待っていました。たれも出てくるものはありません。時計は、十一時をうちました。するうち、おながへつて、気がとおくなりそうなので、テーブルにあつた若鷄わかどりをひときれ、おつかなびつくらたべました。ぶどう酒も四五杯のみました。これでおながができる、げんきも出てきて、ゆつくりそこらを見まわしました。やがて十二時をうったとき、商人は、あいている戸から広間をぬけて出て、いくつもいくつもすばらしいへやを通つて、さいごに、ねごこちよさそうなベッドのおいてあるへやに来ました。それをみると、もうとてもくたびれきつているので、きものをぬぐなり、ごそごそとはいこみました。

あくる朝十時をうつまで、商人は目をさましませんでしたが、目をあいてみて、おどろいたことに、きのうまでできていたぼろぎものが、さっぱりと新しいものにかわっていました。これで、たれか心のいい妖女が、この御殿のあるじなのだとおもつて、窓からそとをふとのぞきますと、ゆうべの雪がきれいになくなって、花でおおわれたあずまやのある、きれいな花園になつているので、いよいよそれにそういないとおもいました。さてもういちど、ゆうべ食事をした大広間おおひろまへもどつてきてみますと、もうちゃんとテーブルに、朝食のしたくがしてありました。こんどはえんりよなく食事をすませると、馬はどうしたかとおもつてみに行きました。すると、とちゆう、ばらの花棚だなの下を通つたので、ふと、末むすめのラ・ベルにたのまれたことをおもひだして、おみやげにひと枝、ばらを折りました。とたんに、ううという、ものすごいうなりごえがしました。そして、みるからおそろしい一ぴきの怪獣かいじゆうが、あらわれるなり、せなかを立ててむかつてきたので、商人はおびえ上がつて、気がとおくなりかけました。

「恩しらずのどちくしよめ。」と、そのけものは、おそろしい声でさげびました。「おれは、お前のいのちをたすけて、この御殿にとめてやったのではないか。それが、なによりおれのだいじにしている、ばらの花をぬすむとはなにごとだ。その代価だいかは、お前のいのちの血ちで払はらわせるぞ。」

商人は、かわいそうに、ふるえ上がつて、怪獣の前にぺったりひれ伏ふしながら、「どのさま、おゆるし下さい。おしかりをうけることとは存ぞんじませんでした。ついむすめ

から、みやげに、一りんばらの花をといつて、のぞまれましたものですから。どうぞ、いのちだけはおたすけ下さいまし。」といいました。

「おれは、とのさまではない。ただのけだものだ。」と、怪獣はいいました。「おれは、おべんちやらはきらいだ。口さきのあまいことばで、つべこべごまかすことはやめてもらおう。だがお前、むすめがあるそうだな。そのなかにひとりぐらい、たぶん来て、お前のいのちに代ろうというものがあるだろうから、それでお前はゆるしてやる。万一、それがいやだというなら、三箇月のうちに、お前がかならず、戻もどつてこなければならぬぞ。」

商人は、むすめたちのうちの、ひとりだって、自分の代りに死んでもらおうなどは、ゆめにもおもいませんでしたが、さしあたりうちへかえって、むすめたちの顔を見て、死にたいとおもいました。それで、かならず戻もどつてくるとちかいますと、怪獣も、それなりゆるしてくれたうえ、から手でかえることはないからといつて、ゆうべねむったへやへ、もういちど行ってみよといつてくれました。そこには、大きな箱があるから、この御殿の中にありそうなもの、なんでもそれにいっぱいつめて行くがいい、いずれあとから箱はうちまでとどけてやるといいました。

商人は、せめて、こどもたちに、もって行ってやるおみやげのできたことだけでもよろこんで、いわれたとおり行ってみますと、なるほど大きな箱があつて、そのそばのゆかに、金貨きんかが山と積つまれていました。商人は箱に金貨をつめると、それなりまた、とぼとぼうちへかえって行きました。つみとつたばらの枝は、そのまま手にもつていて、こどもたちが出むかえますと、まず末のむすめに、ばらの花をわたしながら、「さあ、ラ・ベルちゃんや、これをあげるが、その花一りんが、このあわれなおとうさんに、どんなにたつたか、かんがえもつくまいよ。」といつて、うちを出てからの話を、ひととおりしてきかせました。

そうきくと、ふたりの姉は、大ごえあげて、わあわあ泣きわめきながら、ラ・ベルが、つまらない、ものねだりをして、だいじな父親のいのちとかけがえにしたといつて、せめました。なぜきものか、ゆびわにしなかったか、ばかな子だといつてののしりました。けれど、ラ・ベルは、じぶんがしでかしたあやまちのために、涙一てきながしませんでした。それよりか、自分ひとりをなげだして、父親のいのちに代るかくごを、はつきりきめていたのでございます。

妹のけっしんをきくと、こんどは、男のきょうだいたちが、いっせいにさけび立てま

した。

「いけない、いけない。そんなことをさせるくらいなら、われわれが行って、その怪獣と、むこうを倒すか、こちらが倒されるか、しようぶをつけてやる。」

けれど、商人は、むすこたちをおさえて、それは、あいてがどんなにおそろしいけれども、のだから知らないからだ。それに手むかいをしても、どうせむだにきまつている。それよりか、きようだいたちおたがいにたすけ合って、こののちながくしあわせにくらしてもらいたい。それで安心して、おとうさんは、また戻って行って、のこりのいのちを、怪獣へぎせいにささげるつもりだといって、それなり、自分のへやへ寝に行きました。ところが、おどろいたことに、かなしみにまぎれて、とうにわすれていた約束を、怪獣はちゃんと果たしてくれていて、へやの中に、れいの御殿でみたとおり、大きなおみやげの箱いっぱい金貨をつめたまままで、そっくりおいてありました。商人は、でも、このことを、むすめたちに話さないことにしました。それはお金がはいったときくと、さつそく、町へかえろうといつて、やかましくせめるにきまつていたからです。

さて、そののち三箇月は立ちました。末むすめのラ・ベルのかくごには、すこしのゆるぎもありません。いよいよ、父親について、いっしょに行くことになりました。きょうだいたちは、泣いて涙のおわれをしました。ただ、ふたりの姉むすめだけは、ねぎかにらで目をこすって、むりに出した涙でした。ふたりをのせた馬は、ちゃんと道をおぼえていて、れいのふしぎな御殿へつれて行ってくれました。そして、いつものうまやへ、ずんずんはいつて行きました。

父親とむすめは、わかれて大広間にはいると、こんども、こうこうとあかりがともつていて、テーブルには、ちゃんと二人前のごちそうが、よいいしてありました。食事がすむと、たちまち、すさまじい物音をさせて、怪獣がへやにあらわれました。むすめが、ふるえ上がって、つつぷしていますと、怪獣はそばにやってきて、

「ここへ来たのは、自分からすすんで来たのか。」とたずねました。むすめは、消えそうな声で、「はい。」とこたえました。

「それはどうもありがとう。」と、怪獣は、うなるようにいいました。それから、父親にむかって、

「さあ、それで、お前さんには、あしたの朝すぐかえってもらおう。もうそれなり、ここへはこないでもらいたい。では、ラ・ベル、こんやはお休み。」

「お休みなさい、ラ・ベート。」と、むすめはいいました。ラ・ベートというのは、野のけものです。けものさんという代りに、このお話のなかでは、ラ・ベートとよんでおきましよう。

そのあとで、商人は、もういちど、むすめにたのんで、自分だけのこして、このままかえってもらおうとおもって、ひと晩じゆうかきくどきました。けれど、父親に代ろうというむすめのけっしんは、びくともしませんでした。父親も、ついあきらめて、「怪獣だつて、つまりふびんにおもつて、ラ・ベルになにもあぶないことはしないだろう。」とおもうようになりました。

父親がしょんぼりかえって行つたあと、ラ・ベルも、さすがに目<sup>ま</sup>ぶたがおもたくなりましたが、むりに涙をはらいのけて、御殿の中じゆうあるきまわつてみました。するうち、ふと、一枚のとびらに、「ラ・ベルのへや」と、かいてあるのをみつけておどろきました。あわててあけてみますと、中は小ぎれいにお飾<sup>かぎ</sup>りのできたへやで、本棚<sup>ほんだな</sup>があつて、ハープシコードがおいであつて音楽がたのしくきこえていました。

（まあ、どうしたというのでしょうか。どうせ、きよう一日でいのちをとられるにきまつているわたしのために、こんなにっぱなおへやのしたくが、どうしてしてあるのでしょうか。）

こうおもいながら、ためしに、一冊の本をあけてみますと、金の文字で、

「あなたがのぞんだり、いいつけたりすれば、すぐそのとおりになります。

あなたは、この御殿では、すべての上に立つ女王です。」

と、かいてありました。

（まあ、わたしなのぞみといったら、おとうさまが、いまだどうしていらつしやるか、知ることですわ。）

ラ・ベルがこう心におもいながら、ふと、その姿見<sup>すがたみ</sup>をのぞいたとき、ちようど、父親のうちへかえったところが、そこに、うつりました。姉たちが、出むかえに出て来ました。かなしそうな顔はしながら、ほんとうは、妹の居なくなつたのを、よろこんでいるのがわかりました。まぼろしは、一しゆんで消えました。ラ・ベルは、自分ののぞみを怪獣がかなえてくれたことを、ありがたいとおもいました。

おひるになると、ちゃんと、テーブルに、おひるの食事がならびました。食事のあいだ、うつくしい音楽が、ずっとときこえていました。でも、きこえるだけで、たれも出てくるものはありません。夜よるになったとき、怪獣は出てきて、いつしよに夕食をしようといい出しました。ラ・ベルは、あたまのてっぺんから、足の爪つまさきまで、ぶるぶるふるわせながら、それでもいやということはできません。それを、怪獣がみて、自分をずいぶんみにくいとおもわないかといつて、たずねました。

「はい、おつしやるとおりです。」と、むすめはこたえました。「だって、わたくし、心にもないことは申せませんもの。でも、とてもいい方だとおもっております。」

そんなことで、だんだんうちとけて、たのしく食事がすみました。すると、とつぜん、怪獣が

「ラ・ベルちゃん、あなた、わたしのおよめになってくれますか。」と、いいだしたので、むすめは、びっくりしてしまいました。びっくりしながら、それでも一生けんめい、「わたし、いやでございます。」とこたえました。

怪獣は、うちじゅうふるえるほど、大きなためいきをつきました。そして、かなしそうな声で、

「お休み、ラ・ベル。」といいのこして、へやを出て行きました。むすめは、ほつとしながら、やはり、人のいい心から、きのどくにおもっていました。

こんなふうで三月ほど立ちました。怪獣はまいばんやって来て、いつしよに夕食をたべました。するうち、むすめは、だんだん怪獣のみにくい姿かたちに馴なれてきて、それよいかよけい、そのやさしい、よい心を、このましくおもうようになりました。ただ、あいかわらず、およめにならないかといいつづけるのが、きのどくで、苦しくなりました。それで、あるとき、もうおよめになることはやめて、いつもお友だちでいましょうといえますと、怪獣はよろこんで、そうやって、いつまでも、ここからはなれない約束をしてくれるように、といいました。

ところで、その朝、れいの姿見にうつったところでは、ラ・ベルの父親が、むすめがもう死んでいるとおもって、たいへんかなしがって、重い病気になっていることがわかりました。しかもふたりの姉は、よそへおよめに行っていて、男のきょうだいたちは、兵隊に出ていました。それで、むすめは、怪獣にそのわけを話して、このままながく、ここを出ることができないなら、父親のことが心配で、死んでしまうかもしれないといいまし

た。

すると、怪獣はいいました。

「いいや、けっしてそれまでにして、お前をとめておこうというのではない。お前にそんなおもいをさせるほどなら、怪獣のわたしが、お前をなくしたかなしみのために、死んだほうがましだよ。」

でも、むすめは、ほんの一週間したらまたかえってくるからと、かたく約束して、父親の見まいに行くことをゆるされました。ただ、出て行くとき、鏡の前に、ゆびわをのこしておいて行ってくれればいいと、怪獣はいつて、いつものとおり、お休みなさいをして、出て行きました。

そのあくる朝、目がさめると、ラ・ベルは、ちゃんと、いなかのこやに、はこばれて来ていました。父親は、むすめのぶじな顔を見ると、病気は、けろりとなおってしまいました。

父親は、さつそく、姉たちをむかえに、人を出しました。姉たちは、それぞれ夫おつととつれ立ってやって来ました。およめに行ったものの、この姉たちは、いっこうたのしくくらはしてはいませんでした。ひとりの夫は、いばりやで、みえばかりかぎって、ほんとうの愛情あいじょうを知らない男でした。もうひとりのほうは、わるくちやで、他人のあらばかりみつけて、よろこんでいるような男でした。それで、姉たちは、死んだとおもった末の妹がぶじでいて、しかも、たべものにもきものにも、なにひとつふそくなく、ゆたかにくらしているようすをみて、ねたましくなりました。それで、どうかして、もう二どと怪獣の御殿にかえられないように、かえれば、すぐとおこられて、くいころされてしまうようにといのって、一週間という約束を、むりやりやぶって、いつまでもひきとめておくたくらみをしました。

さて、その十日めの夜でした。ラ・ベルは、姉たちの、わざとちやほやもてなすなかで、夢をみました。それは、きのどくに、怪獣が半分死にかけて、夜、草原の上に、あえぎあえぎ倒たおれている夢でした。むすめは、涙にひたりながら目をさしました。それでいったん床とこからおき出して、ゆびわを鏡の前の台において、また床にはいつて、ぐっすりねむりました。さて、目をさしますと、いつか、また御殿へはこばれて来ているので、ほつと安心しました。それから、晩の食事の時まで、さんざん待ちどおしくくらしして、はやく怪獣にあうことばかりおもっていました。ところが、八時がうち、九時が打っても、怪

獣は姿をあらわしませんでした。

「ああ、わたし、ほんとうに、あのひとを、ころしたのではないかしら。」

そうさけんで、むすめは、庭へとびだしました。そして、夢でみた草原の所へ来ますと  
そのとおり怪獣は気をうしなつて倒れていました。むすめは、はつとして、そのからだ  
をだきかかえました。すると、心臓しんぞうがまだうっているのが分かったので、ちかくの泉か  
ら、清水しみずをくんで来て、その顔にふっかけました。すると、怪獣はかすかに目をあいて、  
虫の息でいいました。

「お前が約束をわすれたので、わたしは物をたべずに死ぬかくごをした。でも、かえつて  
来てくれたから、これで、せめてたのしく死ぬことができます。」

「いいえ、ラ・ベートは死んではなりません。」と、ラ・ベルはいいました。「あなたは  
つまでも生きていて、わたしの夫になっていただきます。いま、わたしは、ほんとうにあ  
なたを愛していることが分かりました。」

このことばが、さげられたとたん、御殿じゆう、火事のようにあかるくかがやきだ  
しました。五色しきの火花が、大空にとびちりました。さかんな音楽のひびきが、大地だいちをふる  
わせました。

おそろしい怪獣のすがたは、どこにもみえなくなりました。

そのかわりに、こうごうしいまでに、りっぱな王子が、そこにいて、むすめの足もとに  
膝ひざまづいていました。そして、むすめのまごころの力で、なが年とけなかつた魔法の呪のろい  
がとけて、ほんとうの姿にかえられたことを、よろこんでいました。

でも、むすめには、まだそれがわからないのです。それで、心配そうな目で、怪獣のゆ  
くえを追っていました。

「まあ、おきのどくなラ・ベート、わたしの怪獣さんは。」

「その怪獣が、わたしですよ。」と、王子がいいました。「あるいじわるな妖女が、わたし  
を苦しめるため、魔法で呪のろいつて、みにくいけもの姿にかえてしまったのです。その  
呪のろいをとくには、いつか心の清いおとめが、わたしのみにくい姿かたちをわすれて、まご  
ころからいたわつてくれるまで、待たなくてはならなかったのです。それがあなただっ  
たのですよ。」

さて、これからあとのお話は、くわしくするまでもないでしょう。怪獣の王子は、ある  
日ふしぎに姿のみえなくなつた、わかい君主くんしゅのゆくえを、たずねまわっていた民たちの

所へ、またかえって行つて、よろこびむかえられました。それもひとりでなく、この世にふたりとないうつくしい顔かたち、そして、それよりももっとうつくしい、やさしい心をもったラ・ベル姫をつれているので、二重のよろこびに、国じゆうがわき立ったのでございませう。



底本：「世界おとぎ文庫（イギリス・フランス童話篇）妖女のおくりもの」小峰書店

入力：大久保ゆう

校正：秋鹿

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。